OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	歌銘茶道具攷 : 茶道具の種類を中心に
Author(s)	岩井, 茂樹
Citation	日本語・日本文化. 2020, 47, p. 110-184
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75882
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究論文〉

歌銘茶道具攷―茶道具の種類を中心に

岩井茂樹

茶の湯の世界には、多種多様な約束事や趣向がある。現在私たちが知っている茶の湯の形は、先人たちが時には苦しみ、またある時にはより楽しくなるように、鋭意工夫してきた結果である。そうした創意工夫の結果を私たちは今享受しながら、それを日本の伝統文化として受け継いでいこうとしている。本論で対象とする歌銘もその一つである。

歌銘とは、言うまでもなく銘の中の一種である。歌銘については、『国史大辞典』の「歌銘」項の解説文が参考になる。そこには次のようにある。

> 茶器などに古歌にちなんで付けた銘のこと。茶器の銘は安土桃山時代以前には、所蔵者（油屋肩衝）・形状（抛頭巾）・釉薬の景色（三日月）・価格（百貫茄子）・即興の逸話（捨子）などによって付けるのが普通であった。ところが安土桃山時代以後、ことに小堀遠州が茶の湯をリードした江戸時代初期以降、形状や景色にちなみながらも、古歌に典拠した銘すなわち歌銘をつけることが流行するようになった。大徳寺の塔頭孤篷庵所蔵の茶杓の「有馬山」という銘は、遠州が『百人一首』の大弐三位の「有馬山いなの笹原」の歌によって付けたもので、歌銘の典型的な一例である。歌銘の出現は、安土桃山時代における和学の興隆・古典復興の気運を反映したもので、古歌集の

断簡（歌切れ）や和歌の色紙・懐紙が掛物として茶室の床に進出したのと軌を一にする現象で、唐物趣味・禅宗趣味に傾いていた従来の茶の湯の和様化への大きな転換を語るよい指標である。一

当初、銘は所蔵者や形状、景色といった外的要因によって決められることが多かったが、小堀遠州が活躍した江戸初期以降、こうした外的要因にさらに歌を付して、銘を付ける行為、つまり歌銘を付けることが流行したというのだ。その背景には、茶の湯に和歌が用いられるようになるなど、茶の湯の和様化が進んだことが大きな要因であったという。二

■歌銘を含む銘研究史と現状

次に歌銘茶道具に関する先行研究をまとめ、その内容と問題点を指摘しておこう。

歌銘茶道具に関する研究は、きわめて少ない、もしくは皆無と言っていい状態であることを最初に述べておきたい。これにはいくつかの理由がある。第一の理由は、茶の湯が本格的に研究されるようになったこと自体が、比較的近年のことであるという点が挙げられよう。茶の湯を主たる研究対象にして、文化的により広い観点から捉えようとする学会、「茶の湯文化学会」が発足したのは、今から遡ること二十数年前の一九九四年のことであった。もちろんそれまでにも歴史学や民俗学といった分野で、茶の湯研究は行われてきた。ただ、それらの多くは茶の湯の歴史や、重要人物、作法、家元制度などに関するものが中心で、その周縁とも言える銘や、そのさらに下位分類にある歌銘について学術的に研究する方法や意義などを見出すことができなかったという事情がある。第二の理由は、歌銘を含む銘というものに対する関心自体が薄かったということが挙げられる。このことは茶の湯に関する展覧会図録を見ても、よくわかる。一九七〇年代の日本では急速な経済成長の影響もあり、多くの茶の湯に関する展覧会が開催された。その際に作成、発売された図録類には銘に関する説明はほとんどないと言っていい。そこにある銘に関する記述

は、単に茶道具の名前として添えられている程度であり、銘の由来などが紹介されることはかなり稀なことであった。ということは、その時期までは主催者側に銘にそれほどの関心がなかったのだろうし、展覧会や図録の鑑賞者たちにとっても、銘に関する説明はそれほど情報価値の高いものではなかったのであろう。もちろん、銘に関してまったく興味がなかったわけではないかもしれないが、その由来について詳しく知りたい、ひいては研究しようとする姿勢はそれほど強いものではなかったに違いない。

こうした事情が目に見えて変化し出したのは、一九八〇年代である。学問の領域において、学際的研究といった言葉が一種の流行語のように提唱され始めたのもこの頃である。とりわけその後半、つまりはバブル経済期に、多くの領域横断的研究が行われるようになり、また従来の研究とはかなり異なった視点と方法を用いて、研究を行うことに高い必要性と価値が認められた時代であった。茶の湯に関しても、それまでの歴史研究にとどまらず、文化的な視点などより広い視野からの研究が求められた。それが結実したものの一つに、先に紹介した「茶の湯文化学会」の発足があった。

今、銘に限って言えば、一九七四年二月に雑誌『淡交』（淡交社）が「『銘』の世界」という特集を組んでいる。銘に対する関心が持たれ、雑誌でも特集が組めるようになるのはこれ以降のことである。まだこの時期は銘にようやく目が向き出した時代といっていいだろう。ただ、歌銘だけで特集が組まれるのは、それから約十年後の一九八五年のことであった。この年の二月に同じ『淡交』が「歌銘の世界」という特集を組んだ。ようやく銘の中でも歌銘だけで特集が組めるような状況が生まれたということである。

その三年後の一九八八年は、銘や歌銘にとって大きな意味のある年となった。この年の秋、茶道資料館で行われた特別展「茶の湯の名器」に、「由来と銘」という副題がついたからである。この展覧会がどれほどの関心を集めたか、筆者は残念ながら当時の状況を知らないが、少なくとも現在銘に関心を持つ者や、研究する者にとってはけっして看過できない大きな出来事であったと言えるだろう。

また、もし銘に関する論考と呼べるものがあるとすれば、この展覧会図録内に収載された諸論考はもっとも早いものであると言えよう。この図録には、掲載順に「茶器ー銘とその由来ー」、八木意知男「歌銘の世界ー茶歌道交渉史の一齣ー」、「茶道具の銘ー室町・桃山時代の様相ー」、「江戸時代における銘の展開」、「座談会　茶の湯の名器ー由来と銘ー」、「資料　茶会記にみる有銘茶器一覧」が収載されている。

もう一つ重要な論考に、『図録　遠州の観た茶入』に所収された名児耶明「遠州の箱書と歌銘」がある[三]。

これらの論考中、本研究においてもっとも関連が深く、重要なものは、八木論文と名児耶論文であるので、次項以降でそれぞれの内容を紹介し、問題点を指摘したいと思う。

■八木論文の意義

八木はまず「歌銘は、各種の茶の名器に対して歌を典拠として銘を与えるものであって、茶道の歴史の中では相当古くから認められる事のようである。例の『初花肩衝』『遅桜肩衝』銘は足利義政命名と伝えられて居り、果たして然らば室町時代からの現象となろうか。爾来歌銘そのものに対しては強い関心が寄せられ続けたが、これを取り立てて纏まった考察対象とした議論は極めて少ない。このことは、特に和歌文学史上から惜しまれる。」とする[四]。この文章からわかるように、歌銘には長い歴史があり、茶の湯に携わる人たちにとっては強い関心が寄せられて来たにも関わらず、纏まった「議論」さえもきわめて稀であった。もちろん茶の湯と和歌の関係について述べた記述は、『茶道全集』巻の十三【特殊研究篇】（一九三七年、創元社）に野生庵梅園「茶道と和歌」以降、近年のものでは井上宗雄「和歌と茶の湯」（千宗室監修『茶道学体系』第九巻【茶と文芸】、二〇〇一年、淡交社）や、『淡交別冊愛蔵版　茶の湯と和歌ー歌切と歌銘の世界ー』（二〇〇八年、淡交社）に収載された記事などがある。

ただいずれの記事や論考も歌銘という観点から見れば、八木論考を超えるような研究成果や指摘は見出せない。井上論文を除き、他のものはいずれも歌銘茶道具の歴史や道具の紹介に終始しているからである。また井上論文にして

も、茶人または茶の湯と和歌の関わりについて広く論じたものであり、それゆえ井上の関心は歌銘茶道具の範疇を超え、掛物など茶の湯全体にまで及んでいる。したがって、これらはいずれも八木論文を超えるものではなく、また関心の範疇も異なっていると言えるのである。

八木の論文に戻ろう。八木はこの論考で命銘の典拠とされた歌を「歌銘歌」とし、「考察対象として諸書から抜き出した歌銘及び歌銘歌」として道具の種類、具体的には歌銘のついた茶入、茶碗、茶杓と、その典拠を主として『国歌大観』に拠って示している。その総計は一七七である。その内訳は、茶入が一四九、茶碗が十六、茶杓が十二。八木はこれらの出典と歌の作者を示している。

さらに八木は「出典の範囲を明らかにする為に一覧表」を作成し、歌銘由来の範囲をより具体化しようとした。分析の結果を八木は次のような言葉で表現している。

古今・新古今等の集の歌が多いことは当然として、勅撰二十一代集の中から満遍なく採歌されていることが知れる。このことは、茶人の和歌に対する深く幅広い教養を物語っている。[五]

つまり、『古今和歌集』や『新古今和歌集』から採られたものが多いが、他の勅撰和歌集からも広く採歌されているというのである。

続いて、歌銘を付ける際のパターンについて、茶入、茶碗は高橋箒庵編『大正名器鑑』（大正名器鑑編纂所、一九二一～一九二七年）、茶杓については『茶道美術全集』第六巻（求龍堂・淡交社、一九七〇年）によって分類し、その過程を考察した。その結果、命銘には次のようないくつかのプロセスが想定されるという。

（ア）器本体の形・釉の状態による場合
（イ）伝来と関わる場合
（ウ）国焼茶入の場合
（エ）茶碗の場合

それぞれを簡単に説明しておくと、（ア）は道具の形状や釉薬の景色をもとに、それを何かに見立て、それに適切と思われる歌を付けたもの。（イ）は、伝来など道具にまつわる逸話にまつわる歌によって付けられたもの。（ウ）は国焼茶入の場合に顕著に認められる傾向であるが、国内の名所、歌の世界では「歌枕」と呼ばれるものを銘としたり、歌枕を含んだ歌を用いるもの。（エ）は、茶碗の場合だが、その命銘の方法は、先の（ア）から（ウ）の範囲を超えるものではなく、茶杓も同様だという。

これらをまとめると次のようなことが言えるという。

結局、歌銘なるものは、器の景色の見立てという感性を問うものを中心に展開し、それに出所伝来をからませた世界といってよい。（中略）

歌銘は、感性を中心とする美意識に基づく場合と、出所伝来を伝えようとする歴史意識に基づく場合と、二通りの方法によって成立している。[六]

歌銘は結局のところ、見立てによるものと、伝来に基づくものの二種類に収斂するというのだ。八木はその他にも同手あるいは写しと呼ばれる茶道具の歌銘や、古歌に拠らない場合も勘案し、次のように論を結んでいる。

要するに、茶道上の一現象たる歌銘は、文学上の史的流れに添って居り、それに伴う広がりを有しているのであり、茶人が和歌を教養としていた結果によるものと断じられる。さらなる研究が望まれよう。[七]

八木が「さらなる研究が望まれよう」としたにも関わらず、残念ながら八木の成果を超える研究成果は今もまだ出ていないという状態だ。それどころか、八木の方法や結論に対する妥当性を検証する作業も行われていない。

■八木論文の問題点

八木の論考が果たした先駆的な役割は高い。非常に挑戦的な試みであった、とも言えるだろう。その意義は大きく、またその研究成果には、今でも学ぶべき点が少なくない。

とはいうものの実は、八木の論文にはいくつかの問題点が存在する。ここでは本研究に関わる点だけを指摘しておく。

一つは、八木が選んでいる歌銘茶道具がすべて歌銘茶道具と言えるかどうか、一度は検討するべきであるということだ。というのも、それらの茶道具の中には歌書付などがなく、伝承や推測によっていつの間にか歌銘茶道具と思われている例も少なくないからだ。歌銘茶道具をどう定義するかにもよるが、少なくとも研究という実証的な立場を採る場合、これは慎重になるべき点であろう。

二つ目は、八木が由来歌（八木のいうところの歌銘歌）の出典を、主に『新編国歌大観』から、それも勅撰和歌集を中心に考察していることである[八]。もちろん『新編国歌大観』はもっとも有用かつ、信頼できるものである。ただし、それは現存する和歌の一部しか掲載されていないでこともまた事実である。実際に和歌研究を行なった経験のある人はすぐに気づくことであるが、それ以外にも翻刻、未翻刻の歌集がまだまだ大量に存在する。

さらに言えば、紀行文や随筆など和歌はあらゆる場所に登場する。それらすべてを網羅することが事実上不可能だ

としても、『新編国歌大観』だけに拠って考察するのは危険である。勅撰和歌集の重要性については今更言うまでもないが、これに関しても勅撰和歌集から直接採った場合だけが想定されるわけではない。勅撰和歌集に載る歌や、有名な歌人の歌は他書にも収載されてきた。とりわけ類題和歌集（和歌の題によって再分類された辞書的な歌集）にそうした傾向が顕著に見られる。それに加え、歌銘茶道具が爆発的に増加する江戸時代には、歌書はもちろんのこと、随筆や名所図絵、軍記物などにも用いられるようになる。八木はこうした実情を考慮していない。これは出典の範囲をより正確に判定する場合に、ある種のズレを生じさせる可能性がある。これは八木だけの問題ではなく、歌銘研究全体の問題でもある。つまり、勅撰和歌集から採られた、採られたはずだ、というある種の思い込みや前提条件が、学問的な判断を誤らせる可能性があるということだ。そういった前提条件を一旦外して考えることも、一度は必要な作業であろう。だが、少なくとも現段階では、こうした試みはまだなされていない。

最後に、八木がここに示している出典や作者に誤記や誤認がいくつか見られることだ。一七七例の内、作者の十一例にこうした誤りがある。これは出典の範囲を『新編国歌大観』に限定したことや、伝承によったために起きたものである。

ここから我々が学ぶべきことは、これまでの前提条件や常識を一度は取り払ってみること、そして伝承や推察はできる限り避け、可能な限り実証的に歌銘茶道具を考察すること。この二点が、先人から我々が学ぶべき、もっとも重要な教訓であろう。

■名児耶論文の内容と限界

一九九六年五月十一日から六月九日の約一ヶ月の間、五島美術館で「遠州の観た茶入」展が行われた。これは「小堀遠州三百五十年大遠諱記念特別展」として大々的に開催された展覧会であった。展覧会のタイトルから明らかなように、これは小堀遠州の茶の湯、特に彼が何らかの形で関わったと推定される茶入を展示する催し物であった。

したがって、展示物や、開催時に発行された図録も遠州関連茶入に限定されたものであった。名児耶論文はこの展覧会の図録に収載された論考である。名児耶は、高橋箒庵編『大正名器鑑』全九巻に収載された四三六点の茶入の中から遠州が箱書、もしくは命銘を行なったとされるものを二〇四点抽出し、分析および考察を加えた。

ここで名児耶は、三十四点の歌銘茶道具について和歌の出典を次のように示している。

八首　『古今集』
五首　『新古今集』
二首　『伊勢物語』『後撰集』『拾遺集』『千載集』『新後撰集』　個人の和歌
一首　『万葉集』『源氏物語』『金葉集』『詞花集』『続後撰集』『続後拾遺集』
　　『風雅集』『新続古今集』『碧玉集』[九]

この結果から、名児耶は「とうぜん、『古今集』『新古今集』から選ぶのが多いが、その他の勅撰集からまんべんなく引用している点に注目すべきであろう。」とし、「三四首すべて遠州の選択としたら、多くの歌集を学んで、和歌に精通していたことを思わせるからである。」としながらも、「あるいは、簡便に和歌を調べる方法を知っていたのであろうか。」という一つの問いも併記している。

つまり、『古今和歌集』と『新古今和歌集』が重視されているという結果は、先行研究でも縷々指摘されてきた通りであり、首肯できるものであるが、むしろ注目すべきは他の歌集や物語からも広く蒐歌されているということだというのだ。それは遠州の和歌的教養の高さに起因するものなのか、あるいは何か和歌を調べる和歌辞典のようなものがあったのではないかということである。いずれにせよ、これだけ広くの歌集類から選歌することは、人並みの教養

や方法ではほぼ不可能に近いということである。

続いて名児耶は歌の内容について分類を行い、次のような結果を得ている。

春　四首　　夏　一首　　秋　四首　　冬　一首
恋　一二首　　雑　七首　　他　五首

この分類で「他」とあるのは、神祇歌や羈旅歌であるようだ。つまり、三十四首の内訳は、四季が十首、恋が十二首、雑が七首、他が五首となったというのだ。この分析結果について、名児耶は次のような感想を述べている。

これをみると、恋の歌が一番多い。四季の歌が合わせて一〇首、雑が七首、旅や神祇など合わせて五首である。茶道具と恋の歌とは縁遠いものという通説とは異なり、茶入の銘に関しては、以外と恋歌が多い。これが、遠州の好みかどうかは知らないが、歌の選択に恋歌が例外とはなっていないのが事実である。一〇

歌の内容、つまり部立で分類した場合も、顕著な偏向や忌避などは見られず、満遍なく歌が採られているというのだ。たとえば、出典としてもっとも多かった『古今和歌集』では、春と秋が二巻ずつ、夏と冬が一巻ずつ、四季としては計六巻となり、恋が五巻、雑が二巻、その他、羈旅、賀、物名、哀傷などが一巻ずつで二十巻を構成しているし、二番目に多かった『新古今和歌集』では四季が六巻、恋が五巻で変わらないが、雑が三巻、神祇や釈教にもそれぞれ一巻が与えられるようになる。もちろん歌集によって巻数は変化するものの、大抵はこれらを大きく外れるようなことは稀である。このような事実から考えると、名児耶が言うようにこの結果は、歌集における部立の構成比に類似しているものである。何らかの意図や特別な作為は感じられない。

ただ茶道具と恋歌の関係について述べている部分は、訂正が必要である。これは、おそらく恋歌を掛物として用いてはならないという事項を淵源としたものであり、それを名児耶は想起しているのだろうが、この点については筆者が茶書や茶会記を分析し、遠州など大名系の茶書や茶会では恋歌が忌避された形跡はないこと、江戸初期に千家流の茶の湯で次第に広まっていった事項であることを明らかにした[一一]。遠州においては、もともと掛物にしろ、茶道具にしろ、恋歌を忌避するような考えはないのである。むしろ『百人一首』などのように、恋歌が四割強を占めるような歌集もあったことを考えると、三十四首中十二首（三十五％）というのは以上に多いとは言い切れない数字である。

この問題は直接本研究と関連するものではないのでひとまず置くとして、本研究にとってより重要なのは、次の箇所である。

> 三四点の和歌をみると、挽家や箱書付に和歌を書き付けたものや、色紙を付属させたもの、遠州自身が関わったことが確認できないものなどまちまちである。[一二]

これは非常に重要な指摘である。これまで歌銘研究が抱える問題がここにある。命銘者や書付の筆者、書付の有無、出典など伝承によるものが多く存在するため、そのことが実証的な研究を妨げる主要因だったのである。詳しくは後述するが、筆者の調査においても同様の問題が出てきた。したがって、歌銘茶道具について考察する場合、従来とは異なる方法が必要であることは明白である。ここでは、ひとまず指摘だけにとどめておく。

■近年の動向

歌銘をはじめとする銘に関する図書や辞書が近年相次いで刊行され、銘をテーマとした展覧会も開催されるように

なってきている。具体例を挙げると、一九九五年には『茶の湯歳時記と銘一覧』（茶の湯ハンドブック）が主婦の友社から出版されたし、九八年には一年にわたって『銘のはなし　十二ヶ月』というテキスト（淡交テキスト）が刊行された。二〇〇五年十二月には雑誌『なごみ』（淡交社）が「茶の湯における銘」という特集を組み、〇八年には先述した『淡交別冊愛蔵版　茶の湯と和歌』が発売されたし、同年から雑誌『月刊遠州』（大有）で「歌銘の世界」が連載され、その発展版として「銘のうしろ側」が現在も連載されている。その他、一二年から翌年にかけて『茶の湯の銘　季節のことば』、『茶の湯の銘　物語のことば』、『茶の湯の銘　和歌のことば』がいずれも淡交新書として刊行され、二〇一四年には目片宗弘『茶道具の銘のはなし』（淡交社）が、一六年には再び淡交テキストとして『茶の湯銘と和歌』（淡交社）が一年にわたって刊行された。

だが、銘にとって一つの到達点とも言えるのは、何と言っても有馬頼底・稲畑汀子・筒井紘一監修『茶の湯の銘大百科』（二〇〇五年、淡交社）の刊行であろう。これは茶の湯の銘に特化した辞書であったが、これまで茶の湯では、茶道具や茶人、名数、禅語などに関する辞書はあっても、銘に焦点化した辞書は皆無であった。こうした辞書が刊行されるようになったことは、すなわち銘に関しての一般的な関心と知識欲が高まってきたということであろう。

展覧会においては、先に示した茶道資料館で行われた特別展「茶の湯の名器ー由来と銘ー」の他、二〇〇三年に藤田美術館で「銘〜茶道具の愛称〜」が春季展として、一一年には「銘のある茶道具〜逸翁流、銘の楽しみ方」が逸翁美術館で夏季展として開催された。

こうした近年の動向の中で、筆者もいくつかの仕事に関わってきた。茶の湯と和歌に関しては、博士後期課程の時代から関わってきたが、銘に深い関心を持ったきっかけとなったのは、雑誌『遠州』（大有）への連載であり、本格的に研究対象として調べ始めたのは淡交テキスト『茶の湯　銘と和歌』（二〇一六年、淡交社）への寄稿であった。本研究はそうした長年にわたる過程を経て、ようやくたどり着いた一つの到着点である。

■「歌銘」再定義の必要性

本研究は、これまで筆者が銘について十年ほどの間考えてきた過程で、気づいたことや問題点、そしてさまざまな反省点を踏まえた上で書いたものだ。つまり、先人の成果を鑑みながら、先行研究で見えてきたいつかの問題点を踏まえた上で歌銘について論じたものである。

再度確認しておくと、従来の研究では、以下のような問題があった。ここでは大きなものだけ挙げておく。

【問題点一】由来歌や命銘者などには、伝承によるものが多い。

【問題点二】由来歌の出典をいわゆる和歌だけに限定している。

【問題点三】勅撰和歌集に由来歌が掲載されている場合、該当する勅撰和歌集から引いたという分析がなされている。

こうした問題点が歌銘茶道具の研究には存在する。

これに筆者はもう一つ大きな問題点を加えてみたいと思う。

【問題点四】箱などに歌が書きつけられているにも関わらず、無銘だったり、単に「歌銘」と称したりする茶道具が大量に存在する。

④に示した事実を鑑みると、歌銘茶道具というものの定義自体を改めて考える必要があることに気づく。

特に本研究の最大の目的は、茶の湯に使用される道具に、歌がどのような形で取り入れられたのか、その実態を明らかにすることである。この目的を達成するためには、従来の「歌銘」の定義、つまり「和歌の句によって付けられた茶器の銘」と、こうした銘をもつ茶道具を「歌銘茶道具」としていた範囲を改める必要がある。

したがって、本研究では次に示すようなものを「歌銘茶道具」と定義し、分析と考察を加える。本研究の「歌銘茶道具」とは、

形式上和歌の形をとっている字句が、箱や筒、添状など茶道具の一部に書き付けられていることが確認できるもので、かつその字句に由来した銘が付与されているか、もしくは具体的な銘は伴っていないものの歌銘と認定されている茶道具

のことである。少し説明をしておこう。

字句の書付に関する部分によって、【問題点一】から【問題点三】における問題の大部分は解決できる。なぜなら書付を伴っていることが、その歌が由来歌であることを証明する一つの材料になるからである。詳しくは本稿中で述べるが、銘の有無に関わらず、歌銘茶道具を調べてみると、命銘者が特定できる場合よりも、書付を行なった人物を特定することのほうがはるかに容易である。なぜなら花押などが伴っているものがあったり、筆跡によって人物が特定できる場合が多かったりするからだ。また歌を書き付けた人物はわかっていても、それが命銘者と異なる場合も決して少なくはないのだ。

たとえば、茶道具が歌銘茶道具となる過程を想定してみよう。その主なプロセスは二つしかない。

パターン①：銘→歌書付
パターン②：歌書付→銘（または無銘）

パターン①の場合、茶道具の景色や由来からまず銘がつけられる。そして歌が箱などに書き付けられる。歌を書き付けるのは、命銘者本人である場合もあるし、後人が銘に因んだ歌を選択する場合もある。いわゆる「追銘」もここに入るだろう。この場合、銘は必ずしも歌から付けられるとは限らない。茶道具にふさわしければ、銘だけでもいいのだ。

一方、パターン②の場合は、茶道具にふさわしい歌が書き付けられる。同時に命銘が行われる場合もある。だがそれだけとは限らない。歌は記されているものの無銘であったり、単に「歌銘」と記される場合もあったりする。

繰り返しになるが、先述した通り、本研究の最大の目的は、茶道具に歌がどのように用いられているのかを明確化することである。したがって、パターン①とパターン②の両方の場合を見る必要があるのだ。

以上のような理由から、本研究では先に示した定義のものを「歌銘茶道具」として扱う。

■歌の範囲

もう一つ断っておかないといけないことがある。

従来の定義では、歌銘茶道具は、和歌や古歌に由来するものとされてきた。だが、本研究では、定義の箇所に示した通り、「形式上和歌の形をとっている字句」とする。すなわち、基本的に五・七・五・七・七音という形をしたものをすべて歌と見做し、そうした形を持つ字句から銘を付与された茶道具を歌銘茶道具とする。

その理由は別稿で明らかになることだが、先に少し分析結果を述べておくと、和歌や古歌と呼ばれるものの中に、一般的に和歌には分類されないものがあるからだ。より具体的に言えば、謡曲の一節や、各時代の流行歌などにも、和歌のまったく同じ形をしたものがあり、それが和歌と誤認されてきたことがわかったからだ。反対に道歌や狂歌とみなされてきたものの中にも、和歌に分類されるものがある。

こうしたことから、本研究ではいったん歌を形で限定し、和歌の形をしたものを歌銘茶道具とすることにした。

また書き付けられた歌についての呼称に関しては、「由来歌」とする。先に紹介した八木はこれを「歌銘歌」としていたが、八木とは「歌銘」の定義が異なることもあり、本研究では「由来歌」という別の呼称を用いることにする。

■研究目的と意義

さて、本研究の最大の目的は先に示した通りであるが、より詳細に記すと次のような①～⑤の項目を行うことが本研究の目的となる。

①歌銘茶道具の由来歌を明確にする。
②由来歌の出典を明示する。
③歌銘茶道具において歌とされているものを再考する。
④命銘または歌書付を行なった茶人が明確になっているものがあるが、それらを対象として茶人または流派間に類似点や相違点が存在するかどうかを明確化する。
⑤もし明らかな相違点が存在したり、ある顕著な傾向が見られたりする場合は、その理由についての考察を行う。

以上に示した五つの目的を果たせれば、歌銘茶道具にいくつかの新知見を付与することができるだろう。たとえば、由来歌の出典に関する特徴と傾向の明確化や、それぞれの茶人たちや流派が好んで用いた歌や出典に関する特徴の明示といった具体的な成果が期待できる。それによって、これまで必ずしも明らかでなかった歌銘茶道具の実態が明確化されるだろう。そしてひいては茶の湯の歴史や思想を歌銘から見直すことができるという可能性もないわけではない。むしろ茶書や茶会記、書状などこれまで茶の湯研究で用いられてきた資料だけでは見えなかった新たな側面を本研究によって示せると思う。ただし、これらすべてを本論文で論じることは不可能であるので、本論文ではこの内、①に関する考察を行う。

■研究方法

では、この五つの目的を達成するために、どのような方法を採るのか。それを以下説明していこう。

一つは、歌書付があることが何らかの方法で確認できるものを対象とすること。先にも述べたように、伝承や推察に基づいた道具が歌銘茶道具とされていることが間々ある。その典型例として、高橋箒庵編『大正名器鑑』で箒庵が推察したものがある。それらの中には、歌書付がないにもかかわらず、歌銘茶道具として取り扱われているものも少なくない。こうした例は『大正名器鑑』に限るものではなく、江戸時代の諸書でも見られることである。これらは本研究では考察の対象外とする。

二つ目は、歌銘茶道具を可能な限り多く蒐集し、由来歌の出典の可能性についてできるだけ広い範囲で考察すること。これは、勅撰和歌集や一部の有名な歌集に限定せず広く出典を求めていく姿勢を貫徹するということである。先述したように、歌はさまざまなところに引かれる。たとえば、歌銘の由来歌がある勅撰和歌集に収載されている和歌だったとしよう。この場合、大きく二つのことが考えられる。一つは、勅撰和歌集から直接引かれる場合。もう一つは、間接的に引かれる場合。前者の場合は、特に問題ないし、従来はこのような場合だけが想定されていた。だが、後者の場合、どこから引かれたのか、その出典を明らかにすることは相当困難な作業となる。だが、もし同じ命銘者が勅撰和歌集以外の本に載る歌を、多く用いて由来歌としていたとすればどうだろう。この場合、勅撰和歌集から直接引いたと考えるよりも、むしろその本から引いたと考える方が自然ではないだろうか。そうしたケースが実際にあるかどうかは別としても、一度はそういった流れを考えてみるべきではないだろうか。こうした立場から、筆者は勅撰和歌集や私撰集、私家集、類題集（題によって分類された歌集）など和歌に関する書物に限定せず、通常和歌研究では論じられることないような書物、たとえば歌謡集や物語、紀行文や随筆などにも目を配り、その中でもっとも確率の高い書物を由来歌の出典と見做すことにする。出典を一つに特定できない場合もあるだろうが、少なくとも出典である可能性と、出典として考えられる範囲は示せるだろう。

最後に、書付または命銘者がわかっている歌銘茶道具を抽出し、茶人ごと、または流派ごとに分類し、個人差または流派による違いなどの有無について考える。従来は歌銘に大きな役割を果たしたとされる小堀遠州の歌の好みや、一部の有名な歌銘茶道具に関しての考察はあったが、遠州に限定せず、遠州の道統に属する者、あるいは松平不昧などの大名たち、千家の茶人たちなどにも考察対象を広げたいと思う。この作業によって、仮に書付を行なった人物や命銘者の情報に多少の誤差があったとしても、それを補うことができるだろう。なぜなら、それぞれの茶人や、各流派の周辺でどんな歌が好まれ、どこからその歌が採用されたのか、といった観点で考えることができるからである。

■範囲と限界

本論に入る前に一つだけ断っておきたいことがある。

それは本研究の限界についてである。それは二つある。一つは、歌銘茶道具の採集に関する事項である。歌銘茶道具の採集は、図録や茶道具辞典、売立目録などを主な採集源とした。それは現在、絵や美術工芸品を実見できる環境にある人がきわめて限られているからだ。またたとえ所蔵者がわかったとしても、詳しく見聞したり、実見したりする機会はめったにない。

また所蔵者がわからない場合も多い。これは個人蔵である場合が多いのだが、これらの所在を調査し、かつ道具を拝見して、書付の有無などを確認することはもはや不可能と言わざるを得ない。これではごくわずかな限られた人しか、研究に携われないことになってしまう。こうした状況は、伝統文化の保存という観点からすれば大事なことだが、学問的には研究の妨げとなることがある。したがって、本研究では、書付のあることが確認できるものを先に示したような諸書で確認し、それらを抽出して分析するという方法を採用した。

もう一つは、命銘者や書付の筆跡の特定に関する事項である。通常、命銘者や書付の鑑定作業は、主に古筆家がしてきた。この部分については、筆者の能力を超えるものであるため、この部分は図録などの解説や先行研究など、先

人の説に委ねざるを得なかった。そもそも本研究の目的と関心は、真贋の鑑定にはない。だからこそ、できるだけ多くの歌銘茶道具を採集することによって、誤認する危険度を低くするよう努めた次第である。

なお最後に、引用に際しては漢字を通用のものに改めたこと、歌については『新編国歌大観』や典拠とした図録類、もしくは表記とは一致しない場合があること（書付や書物によって字句の異同が大きいため）をあらかじめ断っておく。また現在は差別的、侮蔑的とされる表現が含まれる場合もあるが、史料性を重視し、原文のまま用いた。

■銘の特徴

先に述べたように、では「和歌の形式をした字句が書かれている茶道具」を歌銘茶道具として分析を行う。したがって、伝承では歌銘茶道具であるとされているものでも、書付などが確認できない場合は、分析や考察の対象外とした。

こうした基準にもとづき、歌銘茶道具を蒐集した結果、千百九十の歌銘茶道具の存在が確認できた。もちろん実際にはこの何倍もの歌銘茶道具があるに違いない。全数調査を行えれば、より正確なことが言えるだろう。ただ、それは現実的ではないし、いたずらに数を増やすよりも、一定数以上のサンプルがあれば、言えることも少なくない。したがって、本研究ではこの一一九〇点の歌銘茶道具を対象とする。

表一は、その歌銘茶道具一覧である。銘を五十音順に並べ、それぞれの茶道具について読みと、道具の種類を示した。以下、各項目について順に見ていきたい。

表1：歌銘茶道具一覧

銘（通称）	読み	道具名	分類①	分類②	分類③
相生	あいおい	覚々斎原叟作共箱尺八花入	花入		竹
葵草	あおいぐさ	瀬戸黄釉手茶入（破風窯）	茶入	日本	
青柿	あおがき	春慶茶入	茶入	日本	
青柿	あおがき	柿の蔕高麗茶碗	茶碗	朝鮮	
青葉	あおば	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
青葉	あおば	春慶肩衝茶入	茶入	日本	
明石	あかし	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
暁雪	あかつきのゆき	本阿弥光悦作竹茶杓	茶杓		
あかね	あかね	堀口捨己作共筒茶杓	茶杓		
秋風	あきかぜ	釘伊羅保茶碗	茶碗	朝鮮	
秋風	あきかぜ	宗哲作春慶塗歌棗	棗	日本	
秋風	あきかぜ	膳所耳付茶入	茶入	日本	
秋風	あきかぜ	本阿弥光悦作膳所光悦茶碗	茶碗	日本	
秋空	あきぞら	本手斗々屋茶碗	茶碗	朝鮮	
秋月	あきづき	胡銅象耳花入	花入		金属
秋露	あきのつゆ	覚々斎原叟宗左作共筒茶杓	茶杓		
秋野棗	あきのなつめ	藪内不住斎竹心紹智好秋野棗	棗	日本	
秋の夕暮	あきのゆうぐれ	淡々斎作竹茶杓	茶杓		
秋の夕暮	あきのゆうぐれ	小堀宗延正寿作共筒茶杓	茶杓		
秋の夜	あきのよ	萩割高台茶碗	茶碗	日本	
秋の夜	あきのよ	高取焼茶入	茶入	日本	
秋の夜	あきのよ	瀬戸金華山広沢手茶入	茶入	日本	
秋萩	あきはぎ	瀬戸野田手茶入	茶入	日本	
朱の鳥居	あけのとりい	志野焼茶碗	茶碗	日本	
あけほの	あけぼの	小堀宗友政方共筒茶杓	茶杓		
曙	あけぼの	小堀宗実政恒作共筒茶杓	茶杓		
曙	あけぼの	奥高麗茶碗	茶碗	日本	
曙	あけぼの	薩摩茶入	茶入	日本	
阿古屋の松	あこやのまつ	清水道閑作共筒茶杓	茶杓		
浅香	あさか	斗々屋茶碗	茶碗	朝鮮	
朝顔棗	あさがおなつめ	松平不昧好芭蕉写	棗	日本	

浅茅生	あさじう	田村堯中作共筒茶杓	茶杓		
浅茅肩衝	あさじかたつき	古瀬戸肩衝茶入	茶入	日本	
朝霜	あさじも	伊賀茶碗	茶碗	日本	
浅茅山	あさじやま	小堀権十郎篷雪作共筒茶杓	茶杓		
朝露	あさつゆ	高麗本手トトヤ茶碗	茶碗	朝鮮	
朝露	あさつゆ	古薩摩茶入	茶入	日本	
朝露	あさつゆ	瀬戸禾手茶入	茶入	日本	
朝寝髪	あさねがみ	古瀬戸肩衝茶入	茶入	日本	
浅野	あさの	古瀬戸肩衝茶入	茶入	日本	
朝日影	あさひかげ	志野茶碗	茶碗	日本	
浅みどり	あさみどり	小堀宗明正徳作共筒共箱茶杓	茶杓		
浅みどり	あさみどり	一重切花入	花入		竹
蘆（芦）	あし	無学宗衍和尚作共筒茶杓	茶杓		
蘆刈	あしがり	谷崎潤一郎作共筒茶杓	茶杓		
芦の葉	あしのは	清涼院作共筒茶杓	茶杓		
芦葉香合	あしのはこうごう	川上宗寿眉山好芦葉香合	香合		
足引	あしびき	杉木普斎細竹花入	花入		竹
芦辺	あしべ	刷毛目茶碗	茶碗	朝鮮	
あじろ木	あじろぎ	金森宗和共筒茶杓	茶杓		
あすか川	あすかがわ	瀬戸金華山窯飛鳥川手茶入	茶入	日本	
飛鳥川	あすかがわ	瀬戸金華山窯飛鳥川手茶入	茶入	日本	
飛鳥川	あすかがわ	道入作黒茶碗	茶碗	日本	
梓弓	あずさゆみ	鳴物手付茶入	茶入	日本	
亜聖	あせい	人形手茶碗	茶碗	中国	
遊井	あそびい	小堀宗中作共筒茶杓	茶杓		
あたら夜の	あたらよの	小堀遠州作茶杓	茶杓		
あばらや	あばらや	伝与次郎作霰口破釜	茶釜		
雨夜の星	あまよのほし	松平不昧作共筒茶杓	茶杓		
あやめ	あやめ	小堀宗明正徳作共筒共箱茶杓	茶杓		
荒籬	あらがき	高麗彫三島茶碗	茶碗	朝鮮	
嵐山嚢	あらしやまなつめ	玄々斎好嚢	嚢	日本	
有明	ありあけ	瀬戸芋子茶入	茶入	日本	
有明	ありあけ	古萩茶碗	茶碗	日本	
有明	ありあけ	片桐石州作共筒茶杓	茶杓		

有明	ありあけ	備前肩衝茶入	茶入	日本	
有明	ありあけ	堅手平茶碗	茶碗	朝鮮	
有明	ありあけ	瀬戸真中古窯芋子茶入	茶入	日本	
有明平嚢	ありあけひらなつめ	平嚢	嚢	日本	
在原業平	ありわらのなりひら	又玄斎一燈宗室作共筒茶杓	茶杓		
淡路島	あわじしま	万右衛門茶入	茶入	日本	
淡雪	あわゆき	唐物丸壷茶入	茶入	中国	
安全亀	あんぜんき	金森得水作共筒茶杓	茶杓		
安禅寺	あんぜんじ	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
家栄	いえさかえ	高原杓庵作共筒茶杓	茶杓		
家づと	いえづと	徳禅宗義和尚作共筒茶杓	茶杓		
雷	いかずち	益田鈍翁作一重切花入	花入		竹
雷	いかずち	楽山茂三写茶碗	茶碗	日本	
生田	いくた	宇治田原焼茶入	茶入	日本	
池乃鶴	いけのたず	益田鈍翁手造赤筒茶碗	茶碗	日本	
池の月	いけのつき	遠州高取耳付茶入	茶入	日本	
池水	いけみず	高麗彫三島茶碗	茶碗	朝鮮	
池水	いけみず	高麗御本立鶴茶碗	茶碗	朝鮮	
池水	いけみず	古伊羅保片身替茶碗	茶碗	朝鮮	
生駒山	いこまやま	瀬戸肩衝茶入	茶入	日本	
五十鈴川	いすずがわ	山田宗偏作共筒茶杓	茶杓		
泉	いずみ	小堀紅心宗慶作共筒共箱茶杓	茶杓		
石上	いそのかみ	小堀遠州作花入	花入		？
一輪	いちりん	宋影青茶碗	茶碗	中国	
一声	いっせい	玄々斎作共筒茶杓	茶杓		
一星	いっせい	瀬戸大覚寺手真中古窯茶入	茶入	日本	
糸桜	いとざくら	小堀遠州作共筒茶杓（孤蓬庵二十二本の内）	茶杓		
糸柳	やとやなぎ	徳川知止斎斉荘作竹二重切花入	花入		竹
妹背山	いもせまや	生海鼠手茶入	茶入	日本	
伊予簾	いよすだれ	古瀬戸尻膨茶入	茶入	日本	
伊予簾	いよすだれ	徳川治紀公造赤楽茶碗	茶碗	日本	
入相	いりあい	佐久間井戸茶碗	茶碗	朝鮮	
色替	いろがわり	小堀権十郎篷雪作共筒茶杓	茶杓		
色替	いろがわり	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		

色替	いろがわり	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
色替	いろがわり	小堀大膳宗慶作共筒茶杓	茶杓		
色替	いろがわり	小堀大膳宗慶作共筒茶杓	茶杓		
石井	いわい	青井戸茶碗	茶碗	朝鮮	
巌	いわお	本阿弥空中斎光甫作茶碗	茶碗	日本	
岩垣	いわがき	高麗玉子手茶碗	茶碗	日本	
石清水	いわしみず	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
石清水	いわしみず	小堀宗明正徳作共筒茶杓	茶杓		
岩浪	いわなみ	瀬戸真中古窯思河手茶入	茶入	日本	
岩浪	いわなみ	瀬戸玉柏手茶入	茶入	日本	
岩根	いわね	小堀権十郎篷雪作共筒茶杓	茶杓		
岩根	いわね	凡手茶入	茶入	日本	
岩根	いわね	織田貞置作共筒茶杓	茶杓		
岩橋	いわはし	松平不昧作竹一重切花入	花入		竹
岩船	いわふね	上田譲翁安敦作共筒茶杓	茶杓		
岩間	いわま	信楽耳付茶入	茶入	日本	
盤余野	いわれの	瀬戸金華山窯茶入	茶入	日本	
うき雲	うきぐも	松平不昧作共筒茶杓	茶杓		
浮雲	うきぐも	高麗玉子手茶碗	茶碗	朝鮮	
浮雲	うきぐも	瀬戸源十郎茶入	茶入	日本	
うきふし	うきふし	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
鶯	うぐいす	茂右衛門肩衝茶入	茶入	日本	
鶯	うぐいす	静楽院作共筒共箱茶杓	茶杓		
牛の子に	うしのこに	如心斎天然宗左作共筒茶杓・北野三十之内	茶杓		
宇治山（追銘：五月雨）	うじやま	粉引茶碗	茶碗	朝鮮	
薄雲	うすぐも	弘入作赤茶碗	茶碗	日本	
埋火	うずみび	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
埋火	うずみび	小堀権十郎篷雪作共筒茶杓	茶杓		
埋火	うずみび	近衛應山信尋公作共筒茶杓	茶杓		
埋火	うずみび	伊佐半々庵幸琢作共筒茶杓	茶杓		
薄紅葉	うすもみじ	小堀権十郎篷雪作共筒茶杓	茶杓		
泡沫	うたかた	瀬戸真中古窯大覚寺手茶入	茶入	日本	
歌中次	うたなかつぎ	中次棗	棗	日本	
歌中次	うたなかつぎ	千宗旦直書歌中次	棗	日本	

歌棗	うたなつめ	玄々斎好七代宗哲作歌棗	棗	日本	
内里	うちざと	鼠志野茶碗	茶碗	日本	
打よりて	うちよりて	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
宇津山	うつのやま	藤村庸軒作茶杓	茶杓		
宇津山香合	うつのやまこうごう	了々斎好香合	香合		
宇禰野	うねの	御本立鶴茶碗	茶碗	朝鮮	
うの花	うのはな	雨漏茶碗	茶碗	朝鮮	
卯花	うのはな	瀬戸破風窯市場手茶入	茶入	日本	
うのはな	うのはな	熊川茶碗	茶碗	朝鮮	
卯花墻	うのはながき	志野茶碗	茶碗	日本	
卯の花	うのはな	新兵衛作茶入	茶入	日本	
卯の花	うのはな	神尾飛州元知作共筒茶杓	茶杓		
卯の花	うのはな	小堀遠州共筒茶杓	茶杓		
梅香	うめがか	瀬戸青江手茶入	茶入	日本	
梅暦	うめごよみ	藤村庸軒作共筒茶杓	茶杓		
埋木	うもれぎ	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
埋木	うもれぎ	川上不白作共筒茶杓	茶杓		
浦風	うらかぜ	御本狂言袴茶碗	茶碗	朝鮮	
末枯れ	うらがれ	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
浦浪	うらなみ	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
浦のとまや	うらのとまや	啐啄斎作共筒茶杓	茶杓		
浦の苫やの	うらのとまやの	面中次	棗	日本	
浦の苫屋の秋の夕ぐれ	うらのとまやのあきのゆうぐれ	玄々斎作竹舟花入	花入		竹
浦の苫屋	うらのとまや	淡々斎作共筒茶杓	茶杓		
夷・大黒	えびす・だいこく	覚々斎原叟作共筒茶杓	茶杓		
お	お	玄々斎作共筒茶杓	茶杓		
老杉	おいすぎ	横井夜雨作共筒茶杓	茶杓		
老の楽	おいのらく	唐物丸壷茶入	茶入	中国	
老松	おいまつ	淡々斎作塗蒔絵老松茶杓	茶杓		
老松	おいまつ	唐物大海茶入	茶入	中国	
阿ふき	おうぎ	森川如春庵作共筒茶杓	茶杓		
相坂	おうさか	瀬戸音羽山手茶入	茶入	日本	
相坂丸壷	おうさかまるつぼ	古瀬戸真中古窯丸壷茶入	茶入	日本	
大井川	おおいがわ	肥後茶入	茶入	日本	

大井川	おおいがわ	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
大井川	おおいがわ	小堀宗中作共筒茶杓	茶杓		
大沢	おおさわ	井戸呼継楽茶碗	茶碗	朝鮮	
大沢棗	おおさわなつめ	玄々斎好七代宗哲作西山名所棗	棗	日本	
大なゐ	おおない	益田鈍翁作共筒茶杓	茶杓		
大原	おおはら	薩摩甫五茶入	茶入	日本	
岡辺	おかべ	瀬戸後窯正意作茶入	茶入	日本	
翁	おきな	堀口捨己作共筒茶杓	茶杓		
沖の石	おきのいし	松永耳庵作共筒茶杓	茶杓		
奥山	おくやま	粉引茶碗	茶碗	朝鮮	
小倉山	おぐらやま	真呉器茶碗	茶碗	朝鮮	
小倉山	おぐらやま	薩摩瓢箪茶入	茶入	日本	
小塩井戸	おじおいど	古井戸茶碗	茶碗	朝鮮	
小塩山	おしおやま	源十郎後窯茶入	茶入	日本	
遅桜	おそざくら	漢作唐物肩衝茶入	茶入	中国	
遅桜	おそざくら	岡田雪台作共筒茶杓	茶杓		
遅舟	おそぶね	仙叟手造茶碗	茶碗	日本	
おそらく	おそらく	長次郎焼黒茶碗	茶碗	日本	
於大名	おだいみょう	茶入	茶入	？	
落葉	おちば	横井瓢翁宗音作共筒茶杓	茶杓		
落穂	おちぼ	九条武子作共筒茶杓	茶杓		
音羽山	おとわやま	瀬戸破風窯音羽手茶入	茶入	日本	
鬼の首	おにのくび	古伊賀水指	水指		陶器
鬼臍	おにのへそ	清巌宗渭和尚作共筒茶杓	茶杓		
鬼宿	おにのやど	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
小箱根	おはこね	益田鈍翁作共筒茶杓	茶杓		
小舟	おぶね	倉橋権兵作出雲焼茶碗	茶碗	日本	
女郎花	おみなえし	雲鶴筒朝鮮茶碗	茶碗	朝鮮	
女郎花	おみなえし	黄伊羅保茶碗	茶碗	朝鮮	
女郎花	おみなえし	遠州高取撫肩茶入	茶入	日本	
女郎花	おみなえし	高取歪茶碗	茶碗	日本	
女郎花棗	おみなえしなつめ	幸阿弥作蒔絵棗	棗	日本	
女郎花棗	おみなえしなつめ	藪内不住斎竹心紹智好女郎花棗	棗	日本	
思河	おもいがわ	唐津焼茶入	茶入	日本	

思河	おもいがわ	瀬戸真中古窯思河手茶入	茶入	日本	
面影	おもかげ	瀬戸真中古窯野田手茶入	茶入	日本	
面影	おもかげ	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
面影	おもかげ	松平不昧作共筒茶杓・遠州写	茶杓		
面影	おもかげ	川上不白作黒楽茶碗	茶碗	日本	
小山田	おやまだ	小堀宗中作共筒茶杓	茶杓		
遠寺	おんじ	了入作黒楽茶碗	茶碗	日本	
返り咲き（旧名：スカシ）	かえりざき	本阿弥空中斎光甫作共筒茶杓	茶杓		
薫り	かおり	新瀬戸肩衝茶入	茶入	日本	
鏡	かがみ	益田鈍翁作共筒茶杓	茶杓		
鏡河	かがみがわ	瀬戸金華山窯真如堂手茶入	茶入	日本	
鏡山	かがみやま	瀬戸金華山窯真如堂茶入	茶入	日本	
鏡山	かがみやま	益田鈍翁好花入	花入		？
鏡山	かがみやま	竹一重切花入	花入		竹
鏡山	かがみやま	備前焼清水道閑手造茶入	茶入	日本	
杜若	かきつばた	淡々斎作共筒茶杓	茶杓		
かき茄子	かきなす	益田鈍翁所持茄子形茶器	茶入	日本	
垣根	かきね	瀬戸破風窯渋紙手茶入	茶入	日本	
垣根	かきね	瀬戸黒茶碗	茶碗	日本	
香久山	かぐやま	朝日焼茶碗	茶碗	日本	
隠里	かくれざと	与次郎作大阿弥陀堂釜	茶釜		
筧	かけい	瀬戸破風窯渋紙手茶入	茶入	日本	
筧	かけい	酒井抱一作共筒茶杓	茶杓		
筧	かけい	松平不昧作共筒茶杓	茶杓		
筧	かけい	備前茶碗（伊部茶碗）	茶碗	日本	
花月	かげつ	瀬戸茶入	茶入	日本	
かけはし	かけはし	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
かけはし	かけはし	小堀宗明正徳作共筒共箱茶杓	茶杓		
鵲	かささぎ	御本茶碗	茶碗	朝鮮	
笠鷺	かささぎ	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
挿頭	かざし	薩摩焼茶入	茶入	日本	
春日大明神	かすがだいみょうじん	長闇堂作共筒茶杓	茶杓		
春日野	かすがの	朝鮮堅手茶碗	茶碗	朝鮮	
春日野	かすがの	青井戸茶碗	茶碗	朝鮮	

春日山	かすがやま	膳所焼茶入	茶入	日本	
風の音	かぜのおと	圓能斎作共筒茶杓	茶杓		
果報者	かほうもの	黄瀬戸堀の手天目茶碗	茶碗	日本	
亀香合（けふこそ）	かめこうごう	香合	香合		？
亀尾	かめのお	薩摩茶入	茶入	日本	
亀の尾の	かめのおの	益田鈍翁作共筒茶杓	茶杓		
亀のをの山	かめのおのやま	志野茶碗	茶碗	日本	
亀山	かめやま	益田鈍翁作共筒茶杓	茶杓		
亀山	かめやま	名物手井戸茶碗	茶碗	朝鮮	
亀山棗	かめやまなつめ	玄々斎好七代宗晢作溜塗平棗西山十二景内	棗	日本	
通路	かよいじ	瀬戸凡手茶入	茶入	日本	
荷葉	かよう	珠光青磁茶碗	茶碗	中国	
唐琴	からごと	備前丸壷茶入	茶入	日本	
狩衣	かりごろも	瀬戸翁手茶入	茶入	日本	
軽井沢みやげ	かるいざわみやげ	浅間焼赤平茶碗	茶碗	日本	
枯野	かれの	松平不昧作竹一重切花入	花入		竹
蛙	かわず	古瀬戸茶入	茶入	日本	
蛙肩衝	かわずかたつき	唐物肩衝茶入	茶入	中国	
河菜草	かわなぐさ	瀬戸真中古窯野田手茶入	茶入	日本	
川浪	かわなみ	宇治焼肩衝茶入	茶入	日本	
川辺	かわべ	京焼茶入	茶入	日本	
川辺	かわべ	古唐津焼茶入	茶入	日本	
閑	かん	松平不昧作共筒茶杓	茶杓		
閑居	かんきょ	岡田雪台作共筒茶杓	茶杓		
寒月	かんげつ	本阿弥空中斎光甫作黒楽筒茶碗	茶碗	日本	
寒山	かんざん	刷毛目共蓋茶器	茶入	日本	
寒草	かんそう	志野火入茶碗	茶碗	日本	
歓冬	かんとう	瀬戸広口黄薬茶入	茶入	日本	
雁取	がんとり	黒楽茶碗	茶碗	日本	
神無月	かんなづき	松平不昧作竹一重切花入	花入		竹
帰雁	きがん	小堀遠州作二重切竹花入	花入		竹
帰雁	きがん	岡田雪台作共筒茶杓	茶杓		
菊慈童	きくじどう	淡々斎作共筒茶杓	茶杓		
樵歌	きこりうた	黒筒花入	花入		？

北山時雨（時雨）	きたやましぐれ	古瀬戸肩衝茶入	茶入	日本	
砧	きぬた	淡々斎作共筒茶杓	茶杓		
君が代	きみがよ	益田鈍翁作共筒茶杓	茶杓		
君が代	きみがよ	又日庵手造黒楽茶碗	茶碗	日本	
君が代	きみがよ	小堀宗明正徳作共筒共箱茶杓	茶杓		
君不知	きみしらず	小井戸茶碗	茶碗	朝鮮	
君不知（はしたか）	きみしらず	鈍阿焼茶入	茶入	日本	
曙鶯	ぎょうおう	玄々斎作黒楽茶碗	茶碗	日本	
狂歌嚢	きょうかなつめ	千宗旦好狂歌嚢	嚢	日本	
京極	きょうごく	柿の蔕茶碗	茶碗	朝鮮	
曲水の宴	きょくすいのえん	高麗熊川茶碗	茶碗	朝鮮	
曲・直	きょく・ちょく	松平不昧作共筒茶杓	茶杓		
清瀧	きよたき	小堀大膳宗慶作茶杓	茶杓		
清瀧	きよたき	古瀬戸真中古広口茶入	茶入	日本	
蛩紋香合	きりぎりすもんこうごう	松平不昧好原羊遊斎作蛩紋香合	香合		
桐蒔絵茶桶	きりまきえちゃおけ	松平不昧好小島漆壺斎作茶桶	茶桶		
銀河	ぎんが	瀬戸破風窯米市手茶入	茶入	日本	
水鶏	くいな	瀬戸靄手茶入	茶入	日本	
草の庵	くさのいお	小堀宗実正晴作共筒共箱茶杓	茶杓		
口広	くちひろ	志戸呂茶入	茶入	日本	
国祝	くにのいわい	朝日焼茶碗	茶碗	日本	
汲みてこそ	くみてこそ	井伊直弼作共筒茶杓	茶杓		
雲井	くもい	高麗青井戸茶碗	茶碗	朝鮮	
雲井	くもい	瀬戸金華山窯飛鳥川手茶入	茶入	日本	
くもりなき	くもりなき	松平不昧作共筒茶杓	茶杓		
鞍馬山	くらまやま	大綱宗彦和尚作共筒茶杓	茶杓		
栗山桶水指	くりやまおけみずさし	井伊直弼直筆水指	水指		?
栗山花生	くりやまはないけ	井伊直弼直筆花生	花入		竹
呉竹	くれたけ	瀬戸金華山窯広沢手茶入	茶入	日本	
呉竹	くれたけ	細川三斎作共筒茶杓	茶杓		
呉竹	くれたけ	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
呉竹	くれたけ	小堀宗瑞政房作共筒茶杓	茶杓		
紅	くれない	瀬戸真中古大瓶手茶入	茶入	日本	
慶雲	けいうん	近衛公手造赤楽茶碗	茶碗	日本	

月前の虫	げつぜんのむし	淡々斎作共筒茶杓	茶杓		
黄河	こうが	大瀬戸肩衝茶入	茶入	日本	
交河土	こうがのつち	黒釉茶碗	茶碗	？	
江天	こうてん	御深井茶碗	茶碗	日本	
紅梅	こうばい	不識斎宗完作信楽茶碗	茶碗	日本	
紅梅	こうばい	紅梅茶器	茶入	日本	
氷	こおり	松平不昧作共筒茶杓	茶杓		
氷（追銘：香里＜かおり＞）	こおり	瀬戸黒茶碗（瀬戸光悦）	茶碗	日本	
木枯	こがらし	瀬戸金華山窯飛鳥川手茶入	茶入	日本	
木枯らし	こがらし	了々斎作共筒茶杓	茶杓		
木枯らしの森	こがらしのもり	佐川田昌俊作共筒茶杓	茶杓		
古今	こきん	伊羅保茶碗	茶碗	朝鮮	
苔清水	こけしみず	青井戸茶碗	茶碗	朝鮮	
九重	ここのえ	彫三島茶碗	茶碗	朝鮮	
心の花	こころのはな	古萩茶碗	茶碗	日本	
小篠	こざさ	備前伊部茶入	茶入	日本	
小笹の雪	こざさのゆき	信楽筒茶碗	茶碗	日本	
梢	こずえ	小堀権十郎篷雪作共筒茶杓	茶杓		
こだま	こだま	青井戸茶碗	茶碗	朝鮮	
東風	こち	小堀紅心宗慶作共筒共箱茶杓	茶杓		
事足	ことたる	伊木三猿斎作共筒茶杓	茶杓		
事足	ことたる	小堀宗友政方作共筒茶杓	茶杓		
寿	ことぶき	観阿和尚作共筒共箱茶杓	茶杓		
此君	このきみ	細川三斎作共筒茶杓	茶杓		
此里	このさと	瀬戸玉川手芋ノ子茶入	茶入	日本	
児手柏	このてがしわ	瀬戸破風窯音羽手茶入	茶入	日本	
木葉	このは	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
木葉	このは	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
木葉	このは	小堀遠州共筒茶杓	茶杓		
木の本（木の下）	このもと	瀬戸真中古藤四郎茶入	茶入	日本	
このもと	このもと	瀬戸茶入	茶入	日本	
木本	このもと	瀬戸金華山窯生海鼠手茶入	茶入	日本	
こほれ梅	こぼれうめ	松平不昧好原羊斎作梅花蒔絵棗	棗	日本	
小町	こまち	古楽山耳付茶入	茶入	日本	

駒とめて	こまとめて	瀬戸玉川手破風窯茶入	茶入	日本	
こも冠	こもかぶり	藪内比老斎竹隠手造茶碗	茶碗	日本	
こもり山	こもりやま	小堀権十郎篷雪作共筒茶杓	茶杓		
こゆるき	こゆるぎ	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
衣手	ころもで	小堀権十郎篷雪作共筒茶杓	茶杓		
衣手	ころもで	小堀宗中作共筒茶杓	茶杓		
早乙女（の）	さおとめ	杉木普斎作共筒茶杓	茶杓		
棹姫	さおひめ	瀬戸茶入	茶入	日本	
さくらあさ	さくらあさ	小堀宗中作共筒茶杓	茶杓		
桜歌蒔絵棗	さくらうたまきえなつめ	桜歌蒔絵棗	棗	日本	
桜川棗	さくらがわなつめ	中村宗哲作棗	棗	日本	
狭衣	さごろも	小堀宗実政恒作共筒共箱茶杓	茶杓		
さざ波	さざなみ	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
楽々浪	さざなみ	膳所肩衝茶入	茶入	日本	
笹葉	ささのは	村田珠光作茶杓	茶杓		
細雪	ささめゆき	谷崎潤一郎作共筒茶杓	茶杓		
さざれ石	さざれいし	一指斎作共筒茶杓	茶杓		
三四五	さしご・おおがね	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
早苗	さなえ	大綱宗彦和尚作共筒茶杓	茶杓		
さほ河	さほがわ	川上不白作共筒茶杓	茶杓		
五月雨	さみだれ	膳所焼茶入	茶入	日本	
五月雨	さみだれ	松平不昧作共筒茶杓	茶杓		
五月雨	さみだれ	瀬戸茶入	茶入	日本	
五月雨	さみだれ	池田瓢阿作共筒茶杓	茶杓		
五月雨	さみだれ	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
さみだれ	さみだれ	松永耳庵作共筒茶杓	茶杓		
五月雨	さみだれ	古萩割高台茶碗	茶碗	日本	
五月雨	さみだれ	山田宗徧作共筒茶杓	茶杓		
五月雨	さみだれ	松平不昧作共筒茶杓	茶杓		
さもこそは	さもこそは	小堀権十郎篷雪共筒茶杓	茶杓		
更夜の中山	さよのなかやま	小堀宗本正和作共筒茶杓	茶杓		
佐夜の中山	さよのなかやま	千利休作中次	棗	日本	
さらさ	さらさ	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
猿若	さるわか	瀬戸真中古窯野田手茶入	茶入	日本	

ざれ歌	ざれうた	村田一斎作共筒茶杓	茶杓		
蚕	さん	古高取茶入	茶入	日本	
山月	さんげつ	益田鈍翁好茶杓	茶杓		
残月	ざんげつ	薩摩焼茶碗	茶碗	日本	
三十石（旧銘：菊河）	さんじゅっこく	名物海鼠手茶入	茶入	日本	
三夕	さんせき	直斎堅叟宗守作茶杓	茶杓		
残雪	ざんせつ	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
三番叟	さんばそう	覚々斎原叟作共筒茶杓	茶杓		
三楽（三夕）	さんらく	松平不昧作茶杓	茶杓		
椎本	しいもと	玄々斎作竹一重切花入	花入		竹
塩がま	しおがま	野々村仁清作丸壷茶入	茶入	日本	
志賀	しが	瀬戸金華山窯瀧浪手茶入	茶入	日本	
鹿の音	しかのね	上野割高台茶碗	茶碗	日本	
色紙釜	しきしがま	小堀遠州好色紙釜	茶釜		
色紙香合	しきしこうごう	色紙香合	香合		
鴫立つ沢の秋の夕ぐれ	しぎたつさわのあきのゆうぐれ	玄々斎作竹稲塚花入	花入		竹
時雨	しぐれ	瀬戸破風窯米市手茶入	茶入	日本	
時雨	しぐれ	薩摩茶入	茶入	日本	
時雨	しぐれ	松平不昧作竹一重花入	花入		竹
時雨	しぐれ	瀬戸新兵衛後窯茶入	茶入	日本	
しぐれ	しぐれ	伊曽嶋茶碗	茶碗	日本	
時雨	しぐれ	大綱宗彦共筒共箱茶杓	茶杓		
時雨	しぐれ	松平不昧作共筒茶杓	茶杓		
時雨・露	しぐれ・つゆ	神楽丘不入作二本入茶杓	茶杓		
下枝	しずえ	瀬戸藤四郎春慶茶入	茶入	日本	
静御前枕長刀	しずかごぜんまくらなぎなた	杉木普斎作共筒茶杓	茶杓		
したかせ	したかぜ	片桐石州作共筒茶杓	茶杓		
下露	したつゆ	刷毛目茶碗	茶碗	朝鮮	
した紅葉	したもみじ	野崎幻庵作共筒茶杓	茶杓		
下行水	したゆくみず	高取鮫鰄茶入	茶入	日本	
忍摺	しのぶずり	瀬戸後窯新兵衛茶入	茶入	日本	
柴の庵	しばのいお	青井戸茶碗	茶碗	朝鮮	
柴庵	しばのいお	唐津茶碗	茶碗	日本	
柴の戸	しばのと	丹波焼茶入	茶入	日本	

柴の戸	しばのと	小堀宗中作共筒茶杓	茶杓		
渋柿	しぶがき	一元作赤楽茶碗	茶碗	日本	
霜枯	しもがれ	小堀紅心宗慶作共筒共箱茶杓	茶杓		
霜夜	しもよ	小堀宗中作共筒茶杓	茶杓		
霜夜鶴	しもよづる	玄々斎作竹共筒茶杓	茶杓		
霜夜文琳	しもよぶんりん	古瀬戸文琳茶入	茶入	日本	
鵲尾冠	しゃくびかん	又日庵手造黒楽茶碗	茶碗	日本	
しゃち香合	しゃちこうごう	旦入作徳川知止斎斉荘好香合	香合		
鱈香合	しゃちほこ	旦入作香合	香合		
十文字	じゅうもんじ	堅手十文字高台茶碗	茶碗	朝鮮	
酒呑童子（旧名・大江）	しゅてんどうじ	道入作赤楽茶碗	茶碗	日本	
須弥山	しゅみせん	吸江斎作共筒茶杓龍宝山三十ノ内	茶杓		
俊寛	しゅんかん	長次郎作黒楽茶碗	茶碗	日本	
春慶青葉	しゅんけいあおば	春慶肩衝夏山手茶入	茶入	日本	
春宵	しゅんしょう	御本竹の絵茶碗	茶碗	朝鮮	
春色	しゅんしょく	淡々斎作共筒茶杓	茶杓		
春草	しゅんそう	粉引手呉器茶碗	茶碗	朝鮮	
初老	しょろう	高橋箒庵手造黒楽茶碗	茶碗	日本	
白糸	しらいと	瀬戸青江手茶入	茶入	日本	
白川（檜垣）	しらかわ	片桐石州作竹一重切花入	花入		竹
白菊	しらぎく	朝鮮真熊川茶碗	茶碗	朝鮮	
白菊	しらぎく	小堀権十郎蓬雪作共筒茶杓	茶杓		
白菊	しらぎく	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
白菊	しらぎく	松平不昧作共筒茶杓	茶杓		
白菊	しらぎく	武野紹鷗作節無共筒茶杓	茶杓		
白菊棗	しらぎくなつめ	漆壺斎共箱棗	棗	日本	
白菊	しらぎく	小堀権十郎蓬雪作共筒茶杓	茶杓		
白雲	しらくも	楽山焼伊羅保茶碗	茶碗	日本	
白鷺	しらさぎ	長次郎作赤楽茶碗	茶碗	日本	
白雨	しらさめ	雨漏手茶碗	茶碗	朝鮮	
しら露	しらつゆ	小堀宗中作共筒茶杓	茶杓		
白露	しらつゆ	瀬戸金華山窯大津手茶入	茶入	日本	
白露	しらつゆ	備前火襷新兵衛作茶入	茶入	日本	
白波	しらなみ	刷毛目茶碗	茶碗	朝鮮	

白浪	しらなみ	金華山藤浪手茶入	茶入	日本	
白浪	しらなみ	鈍阿焼茶入	茶入	日本	
白浪	しらなみ	瀬戸茶入	茶入	日本	
白浪	しらなみ	瀬戸肩衝茶入	茶入	日本	
志ら浪	しらなみ	松平不昧作共筒茶杓	茶杓		
白浪	しらなみ	三島茶碗	茶碗	朝鮮	
白山	しらやま	金森宗和作共筒茶杓	茶杓		
白雪	しらゆき	岡田雪台作共筒共箱茶杓	茶杓		
しるべ	しるべ	酒井宗雅作竹尺八花入	花入		竹
次郎坊（二郎坊）	じろうぼう	楽家初代長次郎作赤楽茶碗	茶碗	日本	
白妙	しろたえ	小堀宗実正晴好好林邦佳作堅手切形茶碗	茶碗	日本	
晨明	しんめい	小堀権十郎篷雪作共筒茶杓	茶杓		
翠浪	すいろう	神楽岡不入作共筒茶杓	茶杓		
数寄の歌銘茶杓	すきのうためいちゃしゃく	小堀紅心宗慶作共筒茶杓	茶杓		
筋	すじ	御本雲鶴筋茶碗	茶碗	朝鮮	
鈴鹿山	すずかやま	瀬戸真中古大瓶手茶入	茶入	日本	
鈴鹿山	すずかやま	雨漏茶碗	茶碗	朝鮮	
鈴鹿山	すずかやま	瀬戸落穂手茶入	茶入	日本	
鈴声	すずごえ	唐物文琳茶入	茶入	中国	
簾貝香合	すだれがいこうごう	香合	香合		
簾貝香合	すだれがいこうごう	吸江斎直書在判香合	香合		
捨小舟	すておぶね	仙厓義梵作共筒茶杓	茶杓		
須磨	すま	仙叟狂歌歌花入写不見斎作竹尺八花入	花入		竹
隅田川	すみだがわ	玄々斎作共筒茶杓	茶杓		
隅田川	すみだがわ	玄々斎作共筒茶杓	茶杓		
すみながし	すみながし	高保華精作共筒茶杓	茶杓		
住の江	すみのえ	得入作黒楽茶碗	茶碗	日本	
住之江	すみのえ	備前手付水指	水指		陶器
住吉	すみよし	佐野紹益作共筒茶杓	茶杓		
菫	すみれ	松平不昧作共筒茶杓	茶杓		
清渚	せいしょ	玄々斎作共筒茶杓	茶杓		
青苔	せいたい・あおごけ	小堀遠州作茶杓	茶杓		
世外	せがい	松平不昧手造赤楽茶碗	茶碗	日本	
関	せき	松月宙宝宗于作二本入茶杓	茶杓		

瀬々	せぜ	古萩茶碗	茶碗	日本	
瀬田	せた	瀬戸焼茶入	茶入	日本	
瀬谷	せだに	小堀土佐守政武作共筒茶杓	茶杓		
雪玉	せつぎょく	柳沢堯山作竹花入	花入		竹
千金	せんきん	瀬戸肩衝茶入	茶入	日本	
仙桃	せんとう	淡々斎作共筒茶杓	茶杓		
仙人	せんにん	茶屋宗古作共筒茶杓	茶杓		
仙斧	せんぷ	山田宗徧作茶杓	茶杓		
仙斧	せんぷ	山田宗引作共筒茶杓	茶杓		
草庵	そうあん	鬼熊川茶碗	茶碗	朝鮮	
雑器の棗	ぞうきのなつめ	松平不昧好茶器（棗）	棗	日本	
即色	そくしき	瀬戸金華山窯二見手茶入	茶入	日本	
袖ひちて	そでひじて	松平不昧作共筒茶杓	茶杓		
ソノハラ	そのはら	道入作赤楽茶碗	茶碗	日本	
染川	そめがわ	高取焼茶入	茶入	日本	
大黒	だいこく	杉木普斎作共筒茶杓	茶杓		
大古久頭巾	だいこくずきん	無地志野茶碗	茶碗	日本	
大名	だいみょう	古萩焼茶碗	茶碗	日本	
高砂	たかさご	益田鈍翁作共筒茶杓（一双）	茶杓		
高砂	たかさご	小堀宗実正晴作共筒共箱茶杓	茶杓		
高根	たかね	志戸呂焼耳付茶入	茶入	日本	
高浜	たかはま	高麗雲鶴茶碗	茶碗	朝鮮	
瀧	たき	小堀権十郎篷雪作共筒茶杓	茶杓		
滝川	たきがわ	瀬戸破風凡手茶入	茶入	日本	
瀧川	たきがわ	柿の蔕朝鮮茶碗	茶碗	朝鮮	
瀧川	たきがわ	青井戸平茶碗	茶碗	朝鮮	
瀧川	たきがわ	吸江斎無輪二重切花入	花入		竹
瀧津	たきつ	瀬戸後春慶正信茶入	茶入	日本	
瀧浪（別名：青江）	たきなみ	瀬戸金華山窯本歌茶入	茶入	日本	
瀧の白糸	たきのしらいと	小堀紅宗慶作共筒茶杓	茶杓		
竹	たけ	八代宗哲作筆柿香合	香合		
竹雪吹	たけふぶき	赤地友哉作其心庵師・宗吟大姉両筆棗	棗	日本	
田子浦	たごのうら	古萩焼茶碗	茶碗	日本	
田子浦香合	たごのうらこうごう	七代宗哲作香合	香合		

田面	たずら	瀬戸後窯万右衛門作茶入	茶入	日本	
田面	たずら	万兵衛作瀬戸落穂手茶入	茶入	日本	
立鶴	たちづる	出雲茶碗	茶碗	日本	
立鶴	たちづる	御本茶碗	茶碗	朝鮮	
龍田	たつた	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
立田川	たつたがわ	大谷尊由作共筒茶杓	茶杓		
立田川	たつたがわ	萩筆洗茶碗	茶碗	日本	
立田川	たつたがわ	瀬戸金華山飛鳥川手茶入	茶入	日本	
辰市	たつのいち	古瀬戸肩衝茶入	茶入	日本	
谷陰	たにかげ	瀬戸金華山窯玉柏手茶入	茶入	日本	
谷陰	たにかげ	又日庵作共筒茶杓	茶杓		
谷風	たにかぜ	本阿弥空中斎光甫作共筒茶杓	茶杓		
谷川	たにがわ	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
谷川	たにがわ	仁清単瓢茶入	茶入	日本	
谷川	たにがわ	古薩摩肩衝茶入	茶入	日本	
谷川	たにがわ	利休谷川茶入	茶入	日本	
谷川	たにがわ	瀬戸玉川手茶入	茶入	日本	
谷水	たにみず	渋紙手茶入	茶入	日本	
渓水	たにみず	小堀宗泰和尚作共筒共箱茶杓	茶杓		
狸福	たぬきふく	瓢花入	花入		瓢箪
旅衣	たびごろも	高取茶入	茶入	日本	
旅路	たびじ	丹波広口茶入	茶入	日本	
玉柏	たまがしわ	瀬戸金華山窯玉柏手茶入	茶入	日本	
玉葛（漢鶴：かんつる）	たまかずら	漢作唐物茶入	茶入	日本	
玉川	たまがわ	朝鮮茶碗本手蕎麦茶碗	茶碗	朝鮮	
玉川	たまがわ	瀬戸破風窯玉川手茶入	茶入	日本	
玉川	たまがわ	竹の子文志野筒茶碗	茶碗	日本	
玉川	たまがわ	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
玉川	たまがわ	黄伊羅保茶碗	茶碗	朝鮮	
玉篠	たまざさ	小堀権十郎篷雪作共筒茶杓	茶杓		
玉津島	たまつしま	漢作瓢箪茶入	茶入	中国	
玉津島	たまつしま	瀬戸破風凡手茶入	茶入	日本	
玉津島	たまつしま	瀬戸翁手茶入	茶入	日本	
玉椿	たまつばき	小堀権十郎篷雪作共筒茶杓	茶杓		

玉椿	たまつばき	小堀宗本正和作共筒茶杓	茶杓		
玉の井	たまのい	玄々斎手造黒平茶碗	茶碗	日本	
玉緒	たまのお	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
玉水	たまみず	薩摩甫中瓢箪（瓢形）茶入	茶入	日本	
玉水	たまみず	大井戸茶碗	茶碗	朝鮮	
玉村	たまむら	瀬戸真中古大覚寺手茶入	茶入	日本	
玉藻	たまも	唐物文琳茶入	茶入	中国	
玉柳	たまやなぎ	高取焼茶入	茶入	日本	
玉柳	たまやなぎ	瀬戸金華山窯真如堂茶入	茶入	日本	
玉柳	たまやなぎ	高取小耳付手枕形茶入	茶入	日本	
玉柳	たまやなぎ	遠州高取広口肩衝茶入	茶入	日本	
溜水	たまりみず	備前水指	水指		陶器
手向山香合	たむけやまこうごう	玄々斎好飛来一閑作香合	香合		
垂木	たるき	小堀宗中共筒共箱茶杓	茶杓		
竹鶯	ちくおう	細川三斎作共筒茶杓	茶杓		
千草（千種）	ちぐさ	瀬戸後窯正意作茶入	茶入	日本	
竹林	ちくりん	佐野紹益作共筒茶杓	茶杓		
ちとせ	ちとせ	錐呉器茶碗	茶碗	朝鮮	
千歳	ちとせ	熊川茶碗（真熊川）	茶碗	朝鮮	
千年	ちとせ	益田鈍翁作一重切花入	花入		竹
ちとせ	ちとせ	小堀宗中作共筒茶杓	茶杓		
千歳	ちとせ	清水楽山作雲鶴写茶碗	茶碗	日本	
千とせ	ちとせ	蛤・牡丹蒔絵香合	香合		
千とせの春	ちとせのはる	小堀宗中作共筒茶杓	茶杓		
千鳥	ちどり	織田道八作共筒茶杓	茶杓		
千鳥	ちどり	伊部焼丸壷茶入	茶入	日本	
千鳥	ちどり	瀬戸肩衝後窯茶入	茶入	日本	
茶の湯道歌	ちゃのゆどうか	啐啄斎宗左作共筒茶杓	茶杓		
茶の湯には	ちゃのゆには	吸江斎手造黒茶碗	茶碗	日本	
長賀	ちょうが	京極式部卿家仁親王作茶杓	茶杓		
澄月	ちょうげつ	粉引平茶碗	茶碗	朝鮮	
千代棗	ちよなつめ	兪好斎好大棗	棗	日本	
千代の色	ちよのいろ	青磁雲鶴手茶碗	茶碗	朝鮮	
千代の数	ちよのかず	唐津水指	水指		陶器

千代鶴	ちよのつる	肥後八代茶碗	茶碗	日本	
月影	つきかげ	高麗熊川茶碗	茶碗	朝鮮	
月の光	つきのひかり	上野耳付茶入	茶入	日本	
月の都	つきのみやこ	瀬戸藤四郎手真中古窯茶入	茶入	日本	
月花	つきはな	瀬戸金華山大津手茶入	茶入	日本	
月待山香合	つきまつやまこうごう	惺斎好柴田清次作香合	香合		
土筆	つくし	惺入作黒楽茶碗	茶碗	日本	
筑波嶺	つくばね	上田安節作庭焼赤楽茶碗	茶碗	日本	
蔦の下道	つたのしたみち	柿の蔕茶碗	茶碗	朝鮮	
蔦の花道（細道）	つたのはなみち	松平不昧作竹筒花入	花入		竹
包柿（旧銘・木守）	つつみがき	長次郎作赤楽茶碗	茶碗	日本	
鼓の瀧	つづみのたき	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
九折	つづら	山田宗徧作共筒茶杓	茶杓		
つま琴	つまごと	玄々斎作共筒茶杓	茶杓		
露	つゆ	松平宗寂三介作共筒茶杓	茶杓		
露しぐれ	つゆしぐれ	雨漏堅手茶碗	茶碗	朝鮮	
露すかる	つゆすがる	小森松菴作共筒茶杓	茶杓		
鶴	つる	三井泰山作共筒茶杓	茶杓		
鶴首	つるくび	三宅亡羊作共筒茶杓	茶杓		
鶴芝（鶴柴）	つるしば	本阿弥空中斎光甫作茶碗	茶碗	日本	
鶴の毛衣	つるのけごろも	三井泰山作共筒茶杓	茶杓		
鶴里	つるのさと	小堀宗明正徳作共筒茶杓	茶杓		
鶴の巣	つるのす	河村曲全作赤楽茶碗	茶碗	日本	
道成寺	どうじょうじ	長次郎赤楽茶碗	茶碗	日本	
遠山	とおやま	後窯新兵衛茶入	茶入	日本	
遠山	とおやま	淡々斎手造赤茶碗	茶碗	日本	
遠山	とおやま	縣宗知作共筒茶杓	茶杓		
時しらぬ	ときしらぬ	中庭茂三作御本茶碗	茶碗	日本	
常盤	ときわ	瀬戸金華山窯玉柏手茶入	茶入	日本	
常盤	ときわ	釘伊羅保茶碗	茶碗	朝鮮	
常盤	ときわ	瀬戸茶入	茶入	日本	
常磐	ときわ	赤楽茶碗	茶碗	日本	
ときはなる	ときわなる	啐啄斎作共筒茶杓	茶杓		
常盤なる	ときわなる	茶屋宗古作共筒茶杓	茶杓		

常盤山	ときわやま	高取静山作高取鮫鰊耳付茶入	茶入	日本	
都久はやま	ときわやま	板谷波山作共筒茶杓	茶杓		
木賊蒔絵面中次	とくさまきえめんなかつぎ	木賊蒔絵面中次	棗	日本	
常夏	とこなつ	瀬戸真中古窯大瓶手茶入	茶入	日本	
とこは	とこは	伊羅保茶碗	茶碗	朝鮮	
年の暮	としのくれ	益田鈍翁作共筒茶杓	茶杓		
戸難瀬棗	となせなつめ	玄々斎好溜塗平棗七代宗哲作西山十二景内	棗	日本	
鳥羽田	とばた	瀬戸後窯落穂手茶入	茶入	日本	
鳥羽田	とばた	瀬戸大津手茶入	茶入	日本	
篷庇	とまびさし	小堀遠州作竹輪無二重切花入	花入		竹
とまや	とまや	細川三斎好大西清西作四方釜	茶釜		
苫屋	とまや	萩茶碗	茶碗	日本	
富の小川	とみのおがわ	正木直彦作共筒茶杓	茶杓		
友	とも	小堀宗明正徳作共筒共箱茶杓	茶杓		
ともかくも	ともかくも	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
友猿	ともざる	富田宗慶作共筒茶杓	茶杓		
友雀	ともすずめ	落穂手万右衛門作茶入	茶入	日本	
中路	なかみち	古瀬戸朝日春慶茶入	茶入	日本	
長道殿	ながみちどの	本阿弥空中斎光甫作共筒茶杓	茶杓		
歴史	ながれ	堀口捨己作共筒茶杓	茶杓		
流芦	ながれあし	巌如上人作共筒茶杓	茶杓		
夏草露	なつくさつゆ	高取焼肩衝茶入	茶入	日本	
夏衣	なつごろも	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
夏と秋と	なつとあきと	玄々斎作共筒茶杓	茶杓		
夏のゆふ暮	なつのゆうぐれ	蕎麦茶碗	茶碗	朝鮮	
夏山	なつやま	熊川茶碗	茶碗	朝鮮	
夏山	なつやま	古瀬戸肩衝茶入	茶入	日本	
夏山	なつやま	堀田玉映作共筒茶杓	茶杓		
なでしこ	なでしこ	川上不白作共筒茶杓	茶杓		
浪花	なにわ	瀬戸茶入	茶入	日本	
なにはえ	なにわえ	瀬戸翁手茶入	茶入	日本	
那古野	なこそ	益田鈍翁好茶入	茶入	日本	
なまづ	なまず	益田鈍翁好瓢茶入	茶入	日本	
浪の花	なみのはな	高取茶入	茶入	日本	

浪の花	なみのはな	絵志野茶碗	茶碗	日本	
なよ竹	なよたけ	小堀宗瑞作共筒茶杓	茶杓		
双ケ丘嚢	ならびがおかなつめ	玄々斎好七代宗哲作西山名所嚢	嚢	日本	
鳴瀧	なるたき	尾形乾山作共筒茶杓	茶杓		
鳴滝嚢	なるたきなつめ	玄々斎好嚢	嚢	日本	
縄代	なわしろ	小堀権十郎篷雪作共筒茶杓	茶杓		
新室	にいむろ	益田鈍翁作共筒茶杓	茶杓		
二王	におう	了入作赤楽茶碗鈍太郎写	茶碗	日本	
二祖	にそ	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
日本茶楽人	にほんちゃらくじん	杉木普斎作共筒茶杓	茶杓		
如意	にょい	倉持黙知作共筒茶杓	茶杓		
如是相	にょぜそう	川上不白・宗什合作茶杓	茶杓		
庭の鶯	にわのうぐいす	淡々斎作共筒四季四本入茶杓	茶杓		
布引	ぬのびき	瀬戸破風窯米市手茶入	茶入	日本	
ねざめ	ねざめ	唐物文琳茶入	茶入	中国	
子日する	ねのひする	御本茶碗	茶碗	朝鮮	
子日松	ねのひまつ	玄々斎作共筒茶杓	茶杓		
軒もる月	のきもるつき	備前茶入	茶入	日本	
野路	のじ	膳所焼渋紙手肩衝茶入	茶入	日本	
野中の清水	のなかのしみず	山田宗偏作共筒茶杓	茶杓		
野中乃清水	のなかのしみず	小堀大膳宗慶作共筒茶杓	茶杓		
野月	ののつき	丹波焼生野写茶入（出雲焼生野写茶入）	茶入	日本	
野々宮	ののみや	古田織部作共筒茶杓	茶杓		
野々宮	ののみや	玄々斎好七代宗哲作西山名所嚢	嚢	日本	
野もせ	のもせ	後窯中古瀬戸写吉兵衛作芋の子形鶉斑茶入	茶入	日本	
梅花	ばいか	小堀大膳宗慶作共筒茶杓	茶杓		
萩	はぎ	松尾不染斎手造赤楽茶碗	茶碗	日本	
萩の錦	はぎのにしき	二代藤四郎作野田手茶入	茶入	日本	
白雲	はくうん	楽家三代道入作赤楽茶碗（赤光悦）	茶碗	日本	
羽衣	はごろも	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
橋上の蛍	はしうえのほたる	淡々斎茶杓	茶杓		
初風	はつかぜ	今焼朝鮮茶碗	茶碗	日本	
初冠	はつかむり	井上世外作一重切竹花入	花入		竹
初雁	はつかり	杉木普斎作共筒茶杓	茶杓		

初桜	はつざくら	志戸呂茶入	茶入	日本	
初時雨	はつしぐれ	淡々斎作共筒茶杓	茶杓		
初時雨（旧銘：時雨）	はつしぐれ（しぐれ）	古信楽肩衝茶入	茶入	日本	
初嶋	はつしま	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
初霜	はつしも	松平不昧作竹一重切花入	花入		竹
初霜	はつしも	徳川烈公斉昭作共筒茶杓	茶杓		
初瀬山	はつせやま	青柿茶碗	茶碗	朝鮮	
初瀬山	はつせやま	山田宗徧作共筒茶杓	茶杓		
初音	はつね	木下長嘯子作共筒茶杓	茶杓		
初音	はつね	唐物丸壷茶入	茶入	中国	
初花	はつはな	淡々斎作共筒茶杓	茶杓		
初花	はつはる	黒楽茶碗	茶碗	日本	
初雪	はつゆき	松平不昧手造赤楽茶碗	茶碗	日本	
初雪	はつゆき	銅細花入	花入		金属
花	はな	松平不昧作共筒茶杓	茶杓		
花あやめ	はなあやめ	松平不昧作共筒茶杓	茶杓		
花桜	はなざくら	肥後薩摩焼茄子茶入	茶入	日本	
花すすき	はなすすき	御本内刷毛茶碗	茶碗	朝鮮	
花摺	はなずり	高麗真熊川茶碗	茶碗	朝鮮	
花染	はなぞめ	高取焼茶入	茶入	日本	
花染	はなぞめ	瀬戸真中古窯小川手茶入	茶入	日本	
花たちばな	はなたちばな	明々庵宗意作共筒茶杓	茶杓		
花橘	はなたちばな	小堀紅心宗慶宗匠作共筒茶杓	茶杓		
花橘	はなたちばな	道入作黒楽茶碗	茶碗	日本	
花橘	はなたちばな	信楽茶碗	茶碗	日本	
花橘	はなたちばな	信楽筆洗茶碗	茶碗	日本	
花橘	はなたちばな	小堀宗中作写茶碗	茶碗	日本	
花乃香	はなのか	黄瀬戸茶碗	茶碗	日本	
花の影	はなのかげ	野崎幻庵作共筒茶杓	茶杓		
花白川	はなのしらかわ	熊川茶碗	茶碗	朝鮮	
花見山	はなみやま	認得斎作共筒茶杓	茶杓		
花山（の）	はなやまの	松平不昧作共筒茶杓	茶杓		
弄花香満衣	はなをろうすればかおりころもにみつ	不見斎作竹茶杓	茶杓		
柞の杜	ははそのもり	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		

浜荻	はまおぎ	玄々斎作共筒茶杓	茶杓		
早梅	はやうめ	小堀権十郎篷雪作共筒茶杓	茶杓		
早船	はやふね	徳川烈公斉昭作櫂形茶杓	茶杓		
春	はる	一啜斎好四季棗	棗	日本	
春歌	はるうた	小堀宗明正徳作共筒共箱茶杓	茶杓		
春霞	はるがすみ	朝鮮トトヤ茶碗	茶碗	朝鮮	
春霞	はるがすみ	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
春霞	はるがすみ	対馬伊羅保茶碗	茶碗	日本	
春霞	はるがすみ	黒楽茶碗	茶碗	日本	
春霞	はるがすみ	小堀宗中作共筒茶杓	茶杓		
春風	はるかぜ	御本刷毛目茶碗	茶碗	朝鮮	
春風	はるかぜ	瀬戸春慶茶入	茶入	日本	
春風	はるかぜ	絵御本茶碗	茶碗	朝鮮	
春雨	はるさめ	瀬戸金華山窯広沢手茶入	茶入	日本	
春立	はるだち	松浦心月作共筒茶杓	茶杓		
春野	はるの	小堀宗実作政恒共筒茶杓	茶杓		
春のあけぼの	はるのあけぼの	小堀紅心宗慶作共筒共箱茶杓	茶杓		
春紅	はるのくれない	蕎麦茶碗	茶碗	朝鮮	
春の初かぜ	はるのはつかぜ	小堀宗実政恒作共筒茶杓	茶杓		
春の夜	はるのよ	小堀宗実作政恒共筒茶杓	茶杓		
春夜月	はるのよのつき	御本茶碗	茶碗	朝鮮	
春の夜	はるのよ	伊賀焼茶入	茶入	日本	
春山	はるやま	高麗蕎麦茶碗	茶碗	朝鮮	
伴奏	ばんそう	小林逸翁作明月茶碗	茶碗	日本	
東山殿菊折枝	とうやまどのきくのしおり	小堀遠州共筒茶杓	茶杓		
樋口（山井）	ひぐち	漢作唐物肩衝茶入	茶入	中国	
肱枕	ひじまくら	正意作茶入	茶入	日本	
美人	びじん	杉木普斎作共筒茶杓	茶杓		
一重桜	ひとえざくら	渋紙手肩衝茶入	茶入	日本	
人心	ひとごころ	金森宗和作二重切花入	花入		竹
一ツ松	ひとつまつ	小堀遠州作共筒共箱茶杓	茶杓		
一花	ひとはな	高麗茶碗	茶碗	朝鮮	
一ふしの茶杓	ひとふしのちゃしゃく	千利休作共筒竹茶杓	茶杓		
一節	ひとふし	利休古瀬戸肩衝茶入	茶入	日本	

一本	ひともと	瀬戸金華山窯玉柏手茶入	茶入	日本	
一節に千代を	ひとよにちよを	認得斎作共筒茶杓	茶杓		
丁巳歳初春	ひのとみのとしはつはる	小堀紅心宗慶作共筒茶杓	茶杓		
響の灘	ひびきのなだ	瀬戸金華山窯真如堂手茶入	茶入	日本	
姫小松	ひめこまつ	鈍阿焼茶入	茶入	日本	
広沢	ひろさわ	瀬戸金華山広沢手茶入（本歌）	茶入	日本	
広沢	ひろさわ	瀬戸茶入	茶入	日本	
広沢	ひろさわ	粉吹茶碗	茶碗	朝鮮	
広沢棗	ひろさわなつめ	玄々斎好広沢棗	棗	日本	
貧楽	ひんらく	松平不昧作瓢花入	花入		瓢箪
笛竹	ふえたけ	松平不昧作瓢掛花入	花入		瓢箪
深みどり	ふかみどり	野崎幻庵作共筒茶杓	茶杓		
福阿弥	ふくあみ	薮内比老斎竹陰作共筒茶杓	茶杓		
福来	ふくらい	伊木三猿斎作共筒茶杓	茶杓		
不二	ふじ	後窯織部窯茶入	茶入	日本	
富士	ふじ	織田有楽斎作共筒茶杓	茶杓		
富士絵蛤香合	ふじえはまぐりこうごう	玄々斎好香合	香合		
不二無音	ふじおとなし	名物真中古窯藤四郎春慶塞手茶入	茶入	日本	
藤浪	ふじなみ	小堀遠州作竹一重切花入	花入		竹
藤浪	ふじなみ	瀬戸金華山窯藤浪手本歌茶入	茶入	日本	
藤浪	ふじなみ	膳所飯桶茶入	茶入	日本	
藤浪	ふじなみ	小堀遠州作一重切花入	花入		竹
藤浪	ふじなみ	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
藤浪	ふじなみ	瀬戸唐津茶入	茶入	日本	
藤浪	ふじなみ	小堀権十郎篷雪作共筒茶杓	茶杓		
藤波（追銘：茨木）	ふじなみ	柿の蔕茶碗	茶碗	朝鮮	
無事日月長	ぶじにしてにちげつながし	石黒況翁作共筒茶杓	茶杓		
富士曙	ふじあけぼの	玄々斎作赤楽茶碗	茶碗	日本	
富士曙	ふじあけぼの	玄々斎作手造赤肩衝茶入	茶入	日本	
富士の根	ふじのね	小堀宗実政恒作共筒茶杓	茶杓		
藤花	ふじのはな	阿部豊後守作共筒茶杓	茶杓		
藤袴	ふじばかま	破風窯渋紙手茶入	茶入	日本	
蘭	ふじばかま	絵御本茶碗	茶碗	朝鮮	
藤はかま	ふじばかま	志村三休作共筒茶杓	茶杓		

藤花	ふじばな	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
二葉	ふたば	益田鈍翁作竹花入	花入		竹
二見	ふたみ	小堀遠州共筒茶杓	茶杓		
二見潟	ふたみがた	玄々斎作共筒茶杓	茶杓		
吹雪	ふぶき	益田鈍翁賀歌嚢	嚢	日本	
麓	ふもと	伊羅保手内刷毛目茶碗	茶碗	朝鮮	
冬籠	ふゆごもり	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
冬の月	ふゆのつき	松平不昧作共筒茶杓	茶杓		
冬の月	ふゆのつき	瀬戸唐津茶碗	茶碗	日本	
冬の山里	ふゆのやまざと	堀越宗円作茶杓	茶杓		
芙蓉（花いらず）	ふよう	伊賀焼花入	花入		陶器
故郷	ふるさと	瀬戸真中古小川手茶入	茶入	日本	
故郷	ふるさと	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
故郷	ふるさと	古瀬戸肩衝茶入	茶入	日本	
宝樹庵井戸	ほうじゅあんいど	青井戸茶碗	茶碗	朝鮮	
蓬莱	ほうらい	高橋箒庵作共筒茶杓	茶杓		
穂薄	ほすすき	絵御本茶碗	茶碗	朝鮮	
蛍	ほたる	瀬戸春慶茶入	茶入	日本	
ほととぎす	ほととぎす	本阿弥空中斎光甫作共筒茶杓歌針彫	茶杓		
郭公	ほととぎす	小堀宗実正晴作共筒共箱茶杓	茶杓		
時鳥	ほととぎす	松浦鎮信作共筒茶杓	茶杓		
時鳥	ほととぎす	高取焼茶入	茶入	日本	
ほととぎす	ほととぎす	小堀宗明正徳作共筒共箱茶杓	茶杓		
ほととぎす	ほととぎす	本阿弥空中斎光甫作共筒茶杓	茶杓		
ほまれ	ほまれ	上田宗箇作共筒茶杓	茶杓		
ほりかねの井	ほりがねのい	初代大樋長左衛門作大樋焼筒茶碗	茶碗	日本	
籬嚢	まがきなつめ	松平不昧好嚢	嚢	日本	
槇立山の秋の夕ぐれ	まきたつやまのあきのゆうぐれ	玄々作竹二重切花入	花入		竹
槙の葉	まきのは	瀬戸茶入	茶入	日本	
槙の葉	まきのは	井戸茶碗（小貫入）	茶碗	朝鮮	
孫の手	まごのて	千利休作茶杓	茶杓		
十寸鏡	ますかがみ	薩摩甫十瓢箪茶入	茶入	日本	
増鏡	ますかがみ	瀬戸破風窯翁手茶入	茶入	日本	
増鏡	ますかがみ	瀬戸金華山窯玉柏手茶入	茶入	日本	

増鏡	ますかがみ	松平不昧好松枝不入作増鏡写茶入	茶入	日本	
増鏡	ますかがみ	古三嶋茶碗	茶碗	朝鮮	
松	まつ	覚入作黒楽茶碗	茶碗	日本	
松	まつ	瀬戸肩衝茶入	茶入	日本	
松尾嚢	まつおなつめ	玄々斎好七代宗哲作西山名所嚢	嚢	日本	
松が枝	まつがえ	川上不白作共筒茶杓	茶杓		
松陰	まつかげ	小堀宗実正晴作共筒共箱茶杓	茶杓		
松影	まつかげ	古萩茶碗	茶碗	日本	
松陰泉	まつかげいずみ	比喜多宗積作共筒茶杓	茶杓		
松陰	まつかげ	落穂手茶入	茶入	日本	
松風	まつかぜ	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
松風	まつかぜ	黒織部沓茶碗	茶碗	日本	
松風	まつかぜ	古薩摩文琳茶入	茶入	日本	
松風嚢	まつかぜなつめ	初代小島漆壺斎作嚢	嚢	日本	
松島	まつしま	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
松島	まつしま	淡々斎自作手造黒楽茶碗	茶碗	日本	
松島	まつしま	藤四郎春慶肩衝茶入	茶入	日本	
松島	まつしま	井戸茶碗	茶碗	朝鮮	
松島	まつしま	小堀紅心宗慶作共筒共箱茶杓	茶杓		
松永	まつなが	雨漏茶碗	茶碗	朝鮮	
松の下露	まつのしたつゆ	小堀定泰作共筒共箱茶杓	茶杓		
松の月	まつのつき	松平不昧作共筒茶杓	茶杓		
松虫	まつむし	春慶瓢箪茶入	茶入	日本	
松山	まつやま	利休瀬戸後窯茶入	茶入	日本	
松浦	まつら	唐津茶碗	茶碗	日本	
窓竹	まどのたけ	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
窓月	まどのづき	山縣含雪有朋作共筒茶杓	茶杓		
まめ男	まめおとこ	覚々斎作一重切花入	花入		竹
まろはし	まろばし	松平不昧作共筒茶杓	茶杓		
万石	まんごく	三島写俵形茶碗・御深井	茶碗	日本	
三井寺月の歌	みいでらつきのうた	竹一重切花入	花入		竹
澪標	みおつくし	後窯織部窯茶入	茶入	日本	
三日月	みかづき	瀬戸唐津本手茶碗	茶碗	日本	
短夜	みじかよ	瀬戸金華山窯滝浪手茶入	茶入	日本	

みつかき	みずがき	小堀宗中作共筒茶杓	茶杓		
水谷出羽殿	みずたにでわどの	織田有楽斎作共筒茶杓	茶杓		
水の江	みずのえ	小堀遠州共筒茶杓	茶杓		
水の流るる	みずのながるる	小堀宗泰和尚作共筒共箱茶杓	茶杓		
道	みち	小堀紅心宗慶作共筒共箱茶杓	茶杓		
三千年	みちとせ	古銅柑子口花入	花入		金属
三千歳	みちとせ	高取桃形茶碗	茶碗	日本	
緑	みどり	源十郎窯茶入	茶入	日本	
緑	みどり	松平楽翁定信作共筒茶杓	茶杓		
皆口	みなぐち	膳所茶入	茶入	日本	
みなの河	みなのがわ	小堀宗中作共筒茶杓	茶杓		
皆の川	みなのがわ	瀬戸破風窯皆の川手茶入	茶入	日本	
峰雲	みねのくも	御本茶碗	茶碗	朝鮮	
峰の白雪	みねのしらゆき	薩摩肩衝茶入	茶入	日本	
峰の花	みねのはな	上野茶碗	茶碗	日本	
御法	みのり	小堀紅心宗慶作共筒共箱茶杓	茶杓		
三保	みほ	高取焼茶入	茶入	日本	
三保が崎	みほがさき	高橋箒庵作花入	花入		？
三室山	みむろやま	真如堂茶入	茶入	日本	
御裳濯川	みもすそがわ	瀬戸真中古窯大瓶手茶入	茶入	日本	
宮城野	みやぎの	瀬戸真中古窯野田手茶入	茶入	日本	
都の不二	みやこのふじ	了入作楽茶碗	茶碗	日本	
都人	みなこびと	片桐石州作共筒茶杓	茶杓		
深山	みやま	帖左茶碗	茶碗	日本	
深山木	みやまぎ	金森宗和作共筒茶杓	茶杓		
深山木	みやまぎ	小堀遠州作尺八花入	花入		竹
三輪山	みわやま	瀬戸金華山窯生海鼠手茶入	茶入	日本	
昔	むかし	縣宗知作共筒茶杓	茶杓		
武蔵鐙	むさしあぶみ	小堀遠州作竹寸切掛花生	花入		竹
武蔵野	むさしの	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
虫の音	むしのね	小堀宗明正徳作共筒共箱茶杓	茶杓		
六玉川	むたまがわ	淡々斎作共筒茶杓	茶杓		
撫養	むや	小堀遠州蛤香合	香合		
むら雲	むらくも	井戸脇茶碗	茶碗	朝鮮	

村雲	むらくも	御本火替茶碗	茶碗	朝鮮	
村雲	むらくも	小堀権十郎蓬雪作共筒茶杓	茶杓		
村雲棗	むらくもなつめ	松平不昧好棗	棗	日本	
村雲や	むらくもや	絵御本唐草文茶碗	茶碗	朝鮮	
むらさき	むらさき	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
紫	むらさき	古瀬戸茶入	茶入	日本	
紫の庭	むらさきのにわ	縣宗知作共筒茶杓	茶杓		
村雨	むらさめ	瀬戸新兵衛茶入	茶入	日本	
村時雨	むらしぐれ	瀬戸茶入	茶入	日本	
面壁	めんぺき	正意手茶入	茶入	日本	
最上川	もがみがわ	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
藻塩	もしお	瀬戸渋紙手肩衝茶入	茶入	日本	
藻塩	もしお	本阿弥空中斎光甫作共筒茶杓	茶杓		
藻塩	もしお	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
元輔	もとすけ	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
最中	もなか	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
紅葉	もみじ	淡々斎作共筒茶杓	茶杓		
紅葉	もみじ	丹波焼茶入	茶入	日本	
紅葉	もみじ	池田瓢阿作共筒茶杓	茶杓		
紅葉	もみじ	高麗呉器茶碗	茶碗	朝鮮	
紅葉葉	もみじば	高取焼茶入	茶入	日本	
百千鳥	ももちどり	古染付茶碗	茶碗	中国	
桃の花	もものはな	徳川知止斎斉荘作共筒茶杓	茶杓		
八重桜	やえざくら	小堀紅心宗慶作共筒共箱茶杓	茶杓		
八重桜肩衝	やえざくらかたつき	古瀬戸肩衝茶入	茶入	日本	
八重葎	やえむぐら	刷毛目茶碗	茶碗	朝鮮	
八雲（松寿院肩衝）	やくも	唐物肩衝茶入	茶入	中国	
夜光	やこう	古瀬戸小肩衝茶入	茶入	日本	
八十路	やそじ	小堀紅心宗慶好対州粉引茶碗	茶碗	日本	
八橋	やつはし	山田宗偏作共筒茶杓	茶杓		
宿の梅（後藤）	やどのうめ	薩摩焼茶入	茶入	日本	
柳	やなぎ	松平静楽院共筒茶杓	茶杓		
柳かげ	やなぎかげ	黄瀬戸平茶碗	茶碗	日本	
柳蔭	やなぎかげ	瀬戸真中古柳手（柳藤四郎）茶入	茶入	日本	

柳蔭	やなぎかげ	熊川茶碗	茶碗	朝鮮	
柳曲水指	やなぎまげみずさし	柳曲水指	水指		柳
破被	やぶれぶすま	古瀬戸尻膨茶入	茶入	日本	
山おろし	やまおろし	松浦鎮信作頭切竹花入	花入		竹
山陰	やまかげ	瀬戸凡手茶入	茶入	日本	
山葛	やまかずら	御本茶碗	茶碗	朝鮮	
山風	やまかぜ	志戸呂耳付小茶入	茶入	日本	
山風	やまかぜ	益田鈍翁作尺八花入	花入		竹
山賤	やまがつ	杉木普斎手作面取中次茶器	棗	日本	
山雀	やまがら	瀬戸後窯新兵衛茶入	茶入	日本	
山雀	やまがら	斑唐津茶碗	茶碗	日本	
山川	やまかわ	松平不昧作薩摩竹水指	水指		竹
山桜	やまざくら	丹波焼茶入	茶入	日本	
山桜	やまざくら	瀬戸焼茶入	茶入	日本	
山桜	やまざくら	出雲焼茶入	茶入	日本	
山桜	やまざくら	唐物文琳茶入	茶入	日本	
山桜	やまざくら	熊川茶碗	茶碗	朝鮮	
山桜	やまざくら	薩摩細長茶入	茶入	日本	
山桜（三国）	やまざくら	瀬戸真中古窯野田手茶入	茶入	日本	
山里	やまざと	松平不昧作共筒茶杓	茶杓		
山里	やまざと	松平不昧作共筒茶杓	茶杓		
山里	やまざと	出雲焼（楽山焼）倉崎権兵衛作茶碗	茶碗	日本	
山里	やまざと	金海堅手茶碗	茶碗	朝鮮	
山里	やまざと	瀬戸茶入	茶入	日本	
山里	やまざと	瀬戸肩衝茶入	茶入	日本	
山里（旧・村雨）	やまざと	瀬戸文琳茶入	茶入	日本	
山路	やまじ	鈍阿焼瀬戸柿写茶入	茶入	日本	
山路	やまじ	瀬戸肩衝茶入	茶入	日本	
山寺暮秋	やまでらのぼしゅう	小堀紅心宗慶作共筒共箱茶杓	茶杓		
山鳥	やまどり	土屋宗俊作茶杓	茶杓		
山の井	やまのい	小井戸茶碗	茶碗	朝鮮	
山の井	やまのい	藪内比老斎翁竹陰手造筒茶碗	茶碗	日本	
山の井	やまのい	青井戸茶碗	茶碗	朝鮮	
山の端	やまのは	松平不昧作竹一重切花入	花入		竹

山の端（山端）	やまのは	鼠志野茶碗	茶碗	日本	
山端	やまのは	高取焼茶碗	茶碗	日本	
山吹	やまぶき	小堀宗明正徳作共筒茶杓	茶杓		
山吹	やまぶき	瀬戸渋紙手茶入	茶入	日本	
山吹	やまぶき	瀬戸小川手茶入	茶入	日本	
山時鳥	やまほととぎす	淡々斎作共筒茶杓	茶杓		
山時鳥	やまほととぎす	左入作黒楽茶碗	茶碗	日本	
破衣	やれごろも	松平不昧手造赤楽茶碗	茶碗	日本	
夕顔	ゆうがお	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
夕顔（旅寝？）	ゆうがお	尾形乾山作夕顔絵茶碗	茶碗	日本	
夕風	ゆうかぜ	本多伊予守猗蘭斎宗範作茶杓	茶杓		
夕雲	ゆうぐも	益田非黙作手造茶入	茶入	日本	
ゆふくれ	ゆうぐれ	小堀宗延正寿作共筒茶杓	茶杓		
夕暮	ゆうぐれ	小堀権十郎篷雪作共筒茶杓	茶杓		
幽谷	ゆうこく	時代鉈篦花入	花入		竹
夕須遣	ゆうすげ	岩崎小彌太作共筒茶杓	茶杓		
夕涼	ゆうすず	淡々斎作共筒茶杓	茶杓		
ゆふ月の	ゆうづきの	久隅守景作共筒茶杓	茶杓		
夕月夜	ゆうづきよ	竹尺八花入	花入		竹
夕端山	ゆうはやま	青磁中蕪花入	花入		磁器
夕峰	ゆうほう	井戸脇茶碗	茶碗	朝鮮	
夕紅葉	ゆうもみじ	楽一入作黒楽朱釉茶碗	茶碗	日本	
夕柳	ゆうやなぎ	新兵衛作茶入	茶入	日本	
ゆがまする	ゆがまする	小堀大膳宗慶作共筒茶杓	茶杓		
雪	ゆき	玄々斎作共筒茶杓・雪月花三本入	茶杓		
行合	ゆきあい	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
雪消ノ筧	ゆきげのかけい	仙叟作飴釉四方花入	花入		陶器
雪の朝	ゆきのあした	志野桧垣文茶碗	茶碗	日本	
雪の下折	ゆきのしたおれ	千宗旦作茶杓	茶杓		
雪の下折	ゆきのしたおれ	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
雪似白雲	ゆきはくうんににる	金森宗和作共筒茶杓	茶杓		
雪間草	ゆきまのくさ	即中斎自作黒楽茶碗	茶碗	日本	
雪間草	ゆきまのくさ	丹波焼茶碗	茶碗	日本	
雪柳（一名：雪の下春慶）	ゆきやなぎ	瀬戸雪柳手茶入	茶入	日本	

ゆたか	ゆたか	高麗十文字茶碗	茶碗	朝鮮	
ゆたの	ゆたの	玄々斎好八代宗哲作中棗	棗	日本	
ゆの子	ゆのこ	信楽茶碗	茶碗	日本	
よひ月	よいづき	松平不昧作竹一重切花入	花入		竹
養老	ようろう	上野焼瓢箪茶入	茶入	日本	
養老	ようろう	高取焼茶入	茶入	日本	
よこ雲	よこぐも	萩茶碗	茶碗	日本	
与三郎	よさぶろう	絵志野呼継茶碗	茶碗	日本	
芳野川	よしのがわ	瀬戸黄薬上底手茶入	茶入	日本	
吉野山	よしのやま	青磁中蕪花入	花入		磁器
吉野山	よしのやま	後窯茂右衛門茶入	茶入	日本	
よたんぼ	よたんぼ	了々斎作手造黒茶碗	茶碗	日本	
淀屑衝	よどかたつき	瀬戸朝日春慶茶入	茶入	日本	
世に知らぬ	よにしらぬ	御本三島茶碗	茶碗	朝鮮	
米	よね	桑山可斎作共筒茶杓	茶杓		
よの中	よのなか	瀬戸黄釉手瓢箪茶入	茶入	日本	
世の中に	よのなかに	沢庵宗彭作共筒茶杓	茶杓		
よのなかは	よのなかは	沢庵宗彭作瓢花入	花入		瓢箪
蓬生	よもぎう	瀬戸破風窯凡手茶入	茶入	日本	
よもぎが島	よもぎがしま	高橋篷庵彦次郎作共筒茶杓	茶杓		
よものうみ	よものうみ	野々村仁清内海茶入	茶入	日本	
寄浪	よるなみ	瀬戸肩衝茶入	茶入	日本	
夜の綿	よるのにしき	徳川烈公斉昭作黒茶碗	茶碗	日本	
よろこび	よろこび	小堀紅心宗慶作共筒共箱茶杓	茶杓		
万代	よろずよ	信楽茶入	茶入	日本	
よろづ代と	よろずよと	古瀬戸渋紙手茶入	茶入	日本	
萬代	よろずよ	益田鈍翁作竹尺八花入	花入		竹
蘭奢待香合	らんじゃたいこうごう	香合	香合		
柳枝水指	りゅうしみずさし	吸江斎直書在判水指	水指		柳
流水	りゅうすい	小森松菴作共筒茶杓	茶杓		
柳眉	りゅうび	肥前焼丸壷茶入	茶入	日本	
涼月	りょうげつ	淡々斎茶杓	茶杓		
涼月	りょうげつ	左入作黒馬盥茶碗	茶碗	日本	
涼風	りょうふう	田中仙翁作共筒茶杓	茶杓		

臨川寺棗	りんせんじなつめ	玄々斎好棗	棗	日本	
露滴	ろてき	金華山窯茶入	茶入	日本	
若草	わかくさ	徳川烈公斉昭作黒茶碗	茶碗	日本	
若草	わかくさ	小堀権十郎篷雪作共筒茶杓	茶杓		
若草	わかくさ	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
若草	わかくさ	青井戸茶碗（大井戸茶碗）	茶碗	朝鮮	
若草	わかくさ	仁清肩衝茶入	茶入	日本	
若草文琳（国司文琳）	わかくさぶんりん	唐物文琳茶入	茶入	中国	
和歌黒棗	わかくろなつめ	三代小島漆壺斎作和歌黒棗	棗	日本	
若菜	わかな	宗入作黒茶碗	茶碗	日本	
若菜	わかな	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
若菜（若葉？）	わかな	高橋箒庵作共筒茶杓	茶杓		
和歌棗	わかなつめ	中村宗哲作有隣斎好棗	棗	日本	
和歌浦	わかのうら	淡々斎作共筒茶杓	茶杓		
和歌浦大棗	わかのうらおおなつめ	淡々斎好棗五ノ内	棗	日本	
和歌の浦	わかのうら	古銅柑子口花入	花入		金属
和歌の浦	わかのうら	杉木普斎作共筒茶杓	茶杓		
和歌浦	わかのうら	曾呂利花入	花入		金属
若葉	わかば	小堀権十郎篷雪作茶杓	茶杓		
若紫	わかむらさき	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
可中	わくらば	松平不昧作共筒茶杓	茶杓		
和合	わごう	香山結文絵茶碗	茶碗	？	
忘水（旧：白浪）	わすれみず	瀬戸破風窯皆の川手茶入	茶入	日本	
忘水	わすれみず	萩焼雨漏手切高台茶碗	茶碗	日本	
侘びさする	わびさする	藪内不住斎竹心紹智作共筒茶杓	茶杓		
予甲	われもこう	山田宗徧作共筒茶杓	茶杓		
歌銘	？	玄々斎作竹窓二重切細花入	花入		竹
歌銘	？	彫三島茶碗	茶碗	朝鮮	
歌銘	？	冷泉為村作共筒茶杓	茶杓		
歌銘	？	唐津黄流釉茶碗	茶碗	日本	
歌銘	？	淡々斎作共筒茶杓	茶杓		
歌銘	？	淡々斎作共筒茶杓	茶杓		
歌銘	？	玄々斎作玉川焼薄茶碗	茶碗	日本	
歌銘	？	仙叟作共筒茶杓	茶杓		

歌銘	?	高取面取茶碗	茶碗	日本	
歌銘	?	松平不昧作共筒茶杓	茶杓		
歌銘	?	左入作黒楽平茶碗	茶碗	日本	
歌銘	?	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
歌銘	?	山縣可斎作共筒茶杓	茶杓		
歌銘	?	絵御本茶碗	茶碗	朝鮮	
歌銘	?	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
歌銘	?	小堀宗実政恒作共筒茶杓	茶杓		
歌銘	?	小堀権十郎篷雪共筒茶杓	茶杓		
歌銘	?	小堀権十郎篷雪作共筒茶杓	茶杓		
歌銘	?	小堀紅心宗慶作共筒茶杓	茶杓		
歌銘	?	小堀宗実正晴作共筒茶杓	茶杓		
歌銘	?	吸江斎作共筒茶杓	茶杓		
歌銘	?	益田鈍翁所持井戸茶碗	茶碗	朝鮮	
歌銘	?	高麗雨漏茶碗	茶碗	朝鮮	
歌銘	?	慶入作黒楽富士絵茶碗	茶碗	日本	
歌銘	?	小堀宗本正和作共筒共箱茶杓	茶杓		
歌銘	?	小堀宗本作共筒茶杓	茶杓		
歌銘（奉納茶杓）	?	佐野紹益（灰屋紹益・佐野重孝）作茶杓	茶杓		
?	?	出雲焼茶碗	茶碗	日本	
?	?	小堀権十郎作共筒共箱茶杓	茶杓		
?	?	古伊羅保内刷毛目茶碗	茶碗	朝鮮	
?	?	小堀宗中作共筒茶杓	茶杓		
?	?	瀬戸破風窯音羽手茶入	茶入	日本	
?	?	益田克徳作共筒茶杓	茶杓		
?	?	大谷尊由作共筒茶杓	茶杓		
?	?	桜蒔絵白粉解香合	香合		
?	?	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
?	?	時代宇津山蒔絵錫緑香合	香合		
?	?	御本立鶴茶碗	茶碗	朝鮮	
?	?	宗伯茶碗	茶碗	日本	
?	?	徳川知止斎斉荘作戸山焼茶碗	茶碗	日本	
?	?	船越伊予守作共筒茶杓	茶杓		
?	?	松平不昧作共筒茶杓	茶杓		

?	?	大田垣蓮月手造茶碗	茶碗	日本	
?	?	唐津瓢箪水指	水指		陶器
?	?	薮内比老翁竹陰作共筒茶杓	茶杓		
?	?	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
?	?	高取瓢箪茶入	茶入	日本	
?	?	清水道看作共筒茶杓	茶杓		
?	?	長井同玄斎手造赤楽茶碗	茶碗	日本	
?	?	玉川焼茶碗	茶碗	日本	
?	?	薮内比老斎竹陰作茶杓	茶杓		
?	?	成趣庵好今御本瓢箪花入	花入		竹
?	?	徳川知止斎斉荘作竹尺八花入	花入		竹
?	?	船越伊予守作共筒茶杓	茶杓		
?	?	藪内剣仲作竹一重切花入	花入		竹
?	?	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
?	?	縣宗知作小瓢箪花入	花入		瓢箪
?	?	古田織部作共筒茶杓	茶杓		
?	?	三井松籟翁高広手造刷毛目茶碗	茶碗	日本	
?	?	千利休作共筒竹茶杓	茶杓		
?	?	小堀遠州共筒茶杓	茶杓		
?	?	小堀遠州作二重切花入	花入		竹
?	?	後西院作共筒茶杓	茶杓		
?	?	東山焼茶碗	茶碗	日本	
?	?	小堀宗実政恒作共筒茶杓	茶杓		
?	?	前田吉徳作茶杓	茶杓		
?	?	茶釜	茶釜		
?	?	御本茶碗	茶碗	朝鮮	
?	?	細川幽斎作共筒茶杓	茶杓		
?	?	本阿弥空中斎光甫作共筒茶杓	茶杓		
?	?	松平不昧作手造楽山焼茶入	茶入	日本	
?	?	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
?	?	篠井秀次作黒塗中棗	棗	日本	
?	?	無学作共筒茶杓	茶杓		
?	?	啐啄斎作共筒茶杓	茶杓		
?	?	出雲焼蕎麦写茶碗	茶碗	日本	

?	?	飛鳥井雅章作共筒茶杓	茶杓		
?	?	朝日茶碗	茶碗	日本	
?	?	益田鈍翁作共筒茶杓	茶杓		
?	?	瀬戸渋紙手内薬水指	水指		陶器
?	?	小堀宗本正和作尺八花入	花入		竹
?	?	松平不昧作竹一重花入	花入		竹
?	?	中山胡民作和歌蒔絵硯箱	硯箱		
?	?	金輪寺茶器	棗	日本	
?	?	雲錦水指	水指		陶器
?	?	黒織部茶碗	茶碗	日本	
?	?	古薩摩筒茶碗	茶碗	日本	
?	?	灰被天目茶碗	茶碗	中国	
?	?	出雲焼茶碗	茶碗	日本	
?	?	長岡住右衛門作楽山焼蕎麦写茶碗	茶碗	日本	
?	?	無地刷毛目茶碗	茶碗	朝鮮	
?	?	圓能斎作共筒茶杓	茶杓		
?	?	青井戸茶碗	茶碗	朝鮮	
?	?	沢庵宗彭作共筒茶杓	茶杓		
?	?	茶屋宗古作共筒茶杓	茶杓		
?	?	権兵衛作出雲割高台茶碗	茶碗	日本	
?	?	川上不白作赤黒一双茶碗	茶碗	日本	
?	?	小堀宗中共筒茶杓	茶杓		
?	?	黒織部歌文筒茶碗	茶碗	日本	
?	?	彫三島茶碗	茶碗	朝鮮	
?	?	御本弥平太州浜形茶碗	茶碗	日本	
?	?	丹波末広水指	水指		陶器
?	?	朝日焼茶碗	茶碗	日本	
?	?	粉引茶碗	茶碗	朝鮮	
?	?	瓢花入	花入		瓢箪
?	?	一閑折撓大棗	棗	日本	
?	?	玄々斎作玉川焼茶碗	茶碗	日本	
?	?	縣宗知作共筒茶杓	茶杓		
?	?	熊川茶碗	茶碗	朝鮮	
?	?	利休信楽茶碗	茶碗	日本	

?	?	尾形乾山作錆絵染付薄図茶碗	茶碗	日本	
?	?	高麗三島茶碗	茶碗	朝鮮	
?	?	真塗手桶水指	水指		?
?	?	高原焼菊絵彫茶碗	茶碗	日本	
?	?	千利休作花入	花入		竹
?	?	古瀬戸茶入	茶入	日本	
?	?	初代清水六兵衛作御本写錆絵富士図茶碗	茶碗	日本	
?	?	松永耳庵作共筒茶杓	茶杓		
?	?	桐木地茶箱	茶箱		
?	?	川上不白作共筒茶杓・十二支の内	茶杓		
?	?	三嶋茶碗	茶碗	朝鮮	
?	?	尺八花入	花入		竹
?	?	小堀遠州作一重切花入	花入		竹
?	?	啐啄斎秋歌銘対筒茶杓	茶杓		
?	?	唐物丸壷茶入	茶入	中国	
?	?	大樋長左衛門作空中作寒月写黒茶碗	茶碗	日本	
?	?	芦屋浜松地歌入真形釜	茶釜		
?	?	萩茶碗	茶碗	日本	
?	?	小堀宗明正徳作共筒共箱茶杓	茶杓		
?	?	小堀紅心宗慶作共筒共箱茶杓	茶杓		
?	?	小堀紅心宗慶作共筒茶杓	茶杓		
?	?	小堀宗本正和作共筒共箱茶杓	茶杓		
?	?	小堀宗中作共筒茶杓	茶杓		
?	?	小堀遠州作共筒茶杓	茶杓		
?	?	小堀紅心宗慶作共筒茶杓	茶杓		
?	?	小堀宗明正徳作共筒茶杓	茶杓		
?	?	了々斎作二重切花入	花入		竹
?	?	黄伊羅保茶碗	茶碗	朝鮮	
?	?	船越伊予守永景作共筒茶杓	茶杓		
?	?	船越伊予守永景作共筒茶杓	茶杓		
?	?	船越伊予守永景作共筒茶杓	茶杓		
?	?	松ケ枝不入作塗茶杓	茶杓		
?	?	松平不昧作共筒共箱茶杓	茶杓		
?	?	高取焼茶入	茶入	日本	

?	?	小堀遠心宗慶作共箱共箱茶杓	茶杓			
?	?	本阿弥空中斎光甫作共箱茶杓	茶杓			
?	?	小堀宗実正晴作共箱共箱茶杓	茶杓			

■「無銘」の茶道具

まず指摘しておきたいことは、歌書付があっても特に歌銘が付いていなかったり、「歌銘」とは称されているものの、特に銘の書付がなかったりする道具が、非常に多いということである。表一では歌銘のついていないものを「?」、歌銘と称されているものには「歌銘」というように、それぞれ記載してある。ただし、特定の銘がつけられていないという意味では変わりはないので、本研究では同じ類のものとして論じることにする。

こうしたいわば「無銘」のものがどれくらいあるかというと、表一に挙げた千百九十の歌銘茶道具の内、一四六がこれにあたる。これは全体の十二%に相当する。つまり全体の約一割強の茶道具には、歌書付はあるが、特定の銘がない、ということになる。

先述したように、本研究の主眼は茶道具の歌利用の実態を解明することにあるので、この「無銘」の道具も対象とするが、「無銘」であることの意味や理由について、少し考えておきたい。歌が書き付けられているのに、銘がないという事実をどう考えればいいのだろうか。こうした道具は、従来ほとんど考察対象とされてこなかった。だから、この機会に、自分なりの考えを示しておきたい。

まず考えられるのは、景色などによって歌が想起、選定され、それが書き付けられたものの、銘は付けられなかったというパターンである。これは命銘という過程を考える上で、大きなヒントを与えるものである。というのも、歌銘を付ける場合、大きく二つの過程が想定されるからだ。一つは先に歌が想起されその中の字句などから銘が付けら

れるという場合で、もう一つは先に銘があり、その銘にふさわしい歌が選定されて、書き付けられる場合である。後者の場合は、絶対とは言い切れないものの、銘の字句が歌の中に入っていることが、大まかな条件となる。この場合、歌を選ぶのは比較的容易だと思われる。先に条件が与えられているからだ。

一方、前者、つまり歌が先にある場合は、命銘が容易だ。歌の中の字句の中から最適なものを選択すればよいのである。もちろん、いずれの場合も、センスがいるだろうが。

ともあれ、表一に挙げた多くの「無銘」の茶道具の存在は、必ずしも銘が先にあるとは限らないこと、それに歌と銘が同時に付けられるわけではない、ということの証左である。

と同時に考えられるのは、必ずしも銘を付けるために歌を選ぶのではない、ということである。もちろん歌銘を付けるために歌を選ぶ場合もあっただろう。ただ、そうした目的のためだけに歌が選定されるというのなら、「無銘」であることはあり得ない事態だ。こうして考えてみると、歌銘を付けるために歌が選定されたり、書き付けられたりするわけではなく、歌だけを書き残しておくという行き方もあったことがわかるのである。場合によっては、後人に命銘を託すという意図もあったのかもしれない。

再度繰り返すが、本研究の目的は茶道具における歌利用のあり方を明確化することにあるので、こうした「無銘」の歌銘茶道具（呼称としては矛盾しているようにも思われるけれども）も対象にして分析と考察を行う。これらの道具を視野に入れることで得られる知見の方が、これらを除外した場合よりも多いからであり、そのことは論じていく過程において了解していただけるものと思う。

さらにもう一つこうした道具を積極的に取り上げる理由を述べておこう。その理由とは、歌銘とされているものの中には、単なる呼称なのか銘なのかが、判然としないものがあるからだ。こうした例は、「歌中次」や「歌棗」、「桜歌蒔絵棗」などの棗と、「手向山香合」や「月待山香合」などの香合に多いのであるが、これらの中には明らかに呼称であると言えるものと、そうでないものが混在しており、俄かに歌から付けられた銘か否かを判断することができ

ない。たとえば、手向山に関する歌が書かれているために、「手向山香合」と呼ばれ、それが歌銘としても認識されているという場合もあるだろう。そうなると、これが呼称なのか、はたまた歌銘なのかは判別できないのである。したがって、歌の利用の明確化という大きな目的を果たすためには、これらを含めて考える方がよいと判断した次第である。

■好まれる銘と文字

前項で述べた「無銘」の道具を除くと、一〇四四点の道具に歌銘が付けられていることになる。そこには同銘の道具も少なくない。ここには五例以上あるものを、多い順に並べてみる。ただし、漢字などの表記が異なるものであっても読みが同じものは、同銘としてカウントした。

九例：　五月雨

八例：　時雨　藤浪

七例：　有明　卯の花　白菊　白浪　山桜　山里

六例：　女郎花（棗二例を含む）

千歳
花橘
時鳥
若草
色替
五例：谷川
玉川
春霞
増鏡
松島
和歌浦（衆二例を含む）

この結果からわかることを以下に示そう。

まず、大まかな傾向として、歌枕などの特定の場所が歌銘につけられるよりは、季節を示す風物が歌銘として用いられることが多いことが指摘できる。たとえば、五月雨や時雨など上位にあるものはすべて季節を示す景物であり、その名所はあったとしても、この言葉だけでは土地を特定することはできない。それに対し、玉川や松島、そして和歌浦は歌枕になっていることもあり、ほぼ場所が特定できる。

次に言えることは、冬に関する銘は少なく（ここでは時雨のみ）、反対に夏に関する銘が多く見られることである。春秋の景物が好まれるのは和歌でも馴染みのあることだが、夏に関する銘が多いのは意外な結果である。たとえば、五月雨や藤浪、卯の花、花橘、時鳥は必ずしも夏の歌に詠み込まれるわけではないが、その語自体は夏の景物として

認識されることが多い。ちなみに、時鳥であるが、山時鳥という銘を含めると八例となるが、そうなると五月雨、藤浪、時鳥など夏に関する銘がさらに増えるし、他にも「夏山」「夏衣」なども含めると直接的に夏を思わせる銘が意外と多いことに気づく。では、銘で特に夏に関する語が好まれて用いられたのかというと、そうとはまだ言い切れない。なぜなら先にも少し述べたように、夏の景物であっても歌によっては、恋や雑などの歌が用いられていることがあるからだ。この点に関しては別稿で明らかにしたい。もう一つ考えられるのは、夏や冬は、春や秋に比べ景物が少ないため、ある特定の銘に集中する傾向があるということである。つまり春や秋に関する銘は一つ一つの数は少ないものの、種類が多い可能性があるが、それに対して、夏や冬の場合は、数は多いものの、種類が少ないかもしれないのである。これも後の部立に関する論考で再度検討したい。今は指摘と仮説だけに留めておこう。

最後にもう一つだけ指摘しておきたいのは、歌銘に好んで用いられる字があることだ。具体例を挙げると、「初」「浅」「露」「白」「川」「水」「岩」「山」「浦」「浪」「鏡」「松」「竹」「梅」「木」「亀」「鶴」「滝」「谷」「玉」「雪」「月」「花」「常」「野」「風」「深」「村」「朝」「夕」「夜」「世（代）」「老」「仙」「若」「春」「秋」を有した銘や、数字だと「八」「千」「万」などを冠した銘が特に目立つ。これらを分類してみると、おおよそ次のようになる。

①祝賀や神仏に関するもの：「岩」「鏡」「松」「竹」「梅」「亀」「鶴」「常」「世（代）」「玉」「老」「仙」「三」「八」「千」「万」
②はかなく移ろいやすい美しさや、初々しさを表すもの：「白」「露」「初」「浅」「若」
③時刻や季節に関するもの：「朝」「夕」「夜」「雪」「月」「花」「春」「秋」
④地形に関するもの：「山」「川」「浦」「野」

先に挙げた語すべてを分類できるわけではないし、この中には二つ以上の意味が含まれているものもある。また、

これらは単独で用いられることはないので、どういった語と組み合わされるかで、その意味も変わってくるだろう。

ただ、こうした分類をすることによってわかることもけっして少なくない。まず①に分類されたものは、一般的に神が宿るといわれるものや、縁起の良いとされるもの、不変のもの、長寿を表すもの、大変貴重なもの、神道や仏教などで聖数とされるものである。ここから茶道具に対する茶人たちの気持ちを汲み取ることができよう。長く平穏にあってほしいという願いと、それを寿ぐという意識である。特定の人物を思いやる場合もあれば、もっと広く世が平らかであることを願うこともあっただろう。そうした意識が銘にも表れているのである。

②に分類されるのは、ある意味で①とは別の力を持っている言葉であると言える。永遠は確かに美しい。だがその一方で、はかなく脆いものだけが持つ一瞬の輝きと美しさというものも存在する。だからこそ貴重なのだ、という考えがこうした感覚の根底にある。未熟だが、いや未熟だからこそその眩しいほどの美しさを愛でるのである。こうしたものはただ美しいだけではない。何か新しいものをもたらす可能性を秘めているものだ。期待と不安が交差するところに、人はワクワクしてしまう。これも美の一つのあり方なのだ。

③、④は状況、状態、場所を表すものである。これらは連体修飾語として用いられたり、逆に修飾語される名詞であったりする。たとえば「秋の夕暮」なら秋は連体修飾語であり、「夕暮」は被修飾語である。この組み合わせによって情景と風情は大きく変化する。極端な例を挙げると、「春の夕暮」とした場合、我々は風趣をほとんど感じ取ることができないのではないだろうか。「秋の川」とした場合も同じである。「春の川」なら何となくイメージと感興が湧くが、「秋の川」にはあまり趣を感じない。

いずれにせよ、ここには大きく二つの美を見出すことができる。一つは永遠の美。もう一つは一瞬の美である。ただ、意識としては一つなのかもしれない。それは永遠を願う意識である。できるだけ長く美しくあってほしいと願う意識である。こうした美や意識が銘の中に盛り込まれているのである。

そもそも、銘とはそういうものなのだ。銘も名前の一種である。だから、人や土地の名前と共通する点が多いのだ

ろう。だからこそ、長く久しく美しくあれ、という願いが込められ、願いを表す文字を用いる。ただし、一つ大きく異なるのは、②の存在である。はかなくなくなってしまうような一瞬だけの美しさを示す言葉や文字は、当然のことながら、人や土地の名前には通常用いられない。翻って言えば、②の存在こそが、銘を特徴づけている主要因だと言えるのである。

■歌書付茶道具の数量

歌書付のある茶道具には、その種類によって多寡がある。それを見てみよう。表一に示した歌銘茶道具の内訳は次の通りである（表一「分類①」を参照）。

茶杓：四五五点
茶入：二九一点
茶碗：二八九点
花入：七一点
棗：四三点
香合：一九点
水指：一三点
茶釜：六点
硯箱：一点
茶桶：一点
茶箱：一点

合計：一一九〇点

こうして見てみると、もっとも点数の多いのは茶杓で、それに茶入（濃茶器）、茶碗が続き、これら三点で合計一〇三五点となる。これは全体の約八七％、つまりほぼ九割に相当する。もし薄茶器、つまり棗や中次、金輪寺といったもの[一三]を含めると、合計が一〇七八点となり、この場合は全体の約九十一％となる。したがって、歌が用いられる茶道具は、そのほとんどが茶杓、茶入、茶碗であると考えていいだろう。ちなみに、茶杓は茶入と茶碗の約一・六倍、花入の約六・二倍あることになる。

これらの茶道具に共通するのは、直接茶葉に触れる機会のある道具であることだ。茶を掬う茶杓、濃茶の際に茶を入れる茶入、そして茶を点たてて供するための茶碗。これらはいずれも茶会において重要な役割をするだけではなく、直接茶葉に触れる道具なのである。もう少し言えば、茶葉を通して主客がもっとも接近する場面において用いられる道具であると言えよう。これらの道具に歌が介在していることは、非常に興味深い。もちろん歌は筒や箱などに記されているため、饗応時、客が歌を想起することはないかもしれない。だが亭主側は少なくとも歌を把握している。したがって、茶を点てて出すことは、同時に歌を贈る行為ともなると考えることも可能だ。通常、客は後で道具拝見の際に歌を知ることになる。この場合は、客には喫茶後に歌銘とその由来歌、歌意が知らされる。反対に先に茶会記が提示される場合、そこに由来歌が記されている場合がある。そういった場合は、客は先に歌を知ってから、茶を喫することになる。茶だけではなく、銘、歌を通じて主客のイメージと気持ちが交錯するのである。

ただ、ここで一点だけぜひとも指摘しておきたいことは、これらの茶道具のうち、茶入以外は、『玩貨名物記』などの、いわゆる「名物記」の類に収載される機会が少なかったということである。

江戸時代に編纂された名物記では、墨跡と茶入が中心であり、その他の道具に関しては点数や情報が少ないのが一般的である。一例として、明治以降で最大の名物記とされる高橋義雄（号：箒庵）の『大正名器鑑』（大正名器鑑編纂所、一九二一～二七年）の場合はというと、茶入と茶碗だけが紹介されているが、その過程ではかなりの苦労があったことが、次に示す高橋龍雄（号：梅園）「名物茶入茶碗」という文章からわかる。

高橋箒庵翁が『大正名器鑑』を編纂される時に当つて、余はその下に編輯の事に従ひ、現存する実物に就て、悉くその写真を撮し、寸法から附属物を明記し、又その文献にあらはれたものを、なるべく汎く蒐録したのであるが、古来名物としての底本即ち前記の『茶器名物集』、『玩貨名物記』、『古今名物類聚』及び『瀬戸陶器濫觴』の四種を底本として、茶入の名物は比較的容易に定めることが出来たが、茶碗に至つては、前述の如く何等底本と称すべきものがなかつたので、伏見屋忠次郎の覚書と思はれる写本『楽焼名物茶碗集』、又は本屋惣吉の『苦心録』、紀伊国屋彦三郎の『閑窓雑記』、草間和楽の『茶器名物図彙』などに拠つて、名物茶碗とおぼしきものを選定し、他は皆箒庵自身の鑑識に由つて選定せられたものである。[一四]

この文章から、茶入についての選定は比較的容易であったが、茶碗については苦心したことや、箒庵自身個人的な選定眼に依らざるを得なかったことがわかる。

その結果、『大正名器鑑』に収載された茶入と茶碗の数は次のようになったという。

『大正名器鑑』所載名物茶入茶碗総数

	唐物	**和物**	**島物**	
茶入	一四七	二八六	三	合計四三六点
	支那	**朝鮮**	**日本**	
茶碗	五五	二三四	一五〇	合計四三九点[一五]

こうして結果的にはほぼ同数の茶入と茶碗を掲載することができたようだが、茶碗の選定、情報の蒐集にはかなりの

苦労があったことが窺える。

この他の道具についても、遅かれ早かれ茶碗と同様の状態であり、多くの道具が広く紹介され、価値や評価が定着するのは、第二次世界大戦前から戦後にかけてのことであった。たとえば、先の歌銘茶道具でもっとも数が多かった茶杓の場合、『遠州流茶杓集』（茶道文庫二十二、成立等不明）など、流派によっては名物なり模範となる茶杓集が編まれたが、一般的に認知されるようになるのは、高原慶三（号：杓庵）『茶杓三百選』全三冊（杓庵刊行会、一九五二〜三年）と『茶杓拾遺集』（杓庵刊行会、一九六五年）が編まれてから後のことであった。

■茶杓と歌書付

これら三つの道具の中でも群を抜いて多いのが竹で作られた茶杓である。その数は茶入や茶碗の約一・六倍に相当する。また、これらの茶杓はほぼ一〇〇%、竹製の茶杓である。

では、素材はひとまず置くとして、どうして茶杓に歌書付が多いのか。その理由を考えてみよう。

最大の理由は、他の道具に比べると容易に作ることができるからではないだろうか。適当な竹と道具があれば、茶杓は自分で作れる。もちろん、流派によっては茶杓削り自体に口訣があったり、約束事があったり、下削りという作業を行う人がいたりする場合もあり、実際はなかなか難しいものだ。ただ、茶入や茶碗を作ることを思えば、簡単であるし、また作る機会も多い。たとえば五〇歳になった記念や、新年に、といったように、何か機会があれば、何本でも作ることができる。現に、三本や六本、二〇本など、数本でセットというものも存在する。奉納、贈答の際にも好んで用いられる。茶杓と銘だけでもいいだろうが、そこに歌を添えれば、茶杓と歌を同時に贈ることができる。なぜなら、茶人が自らの手を用いて作り、歌を添えれば、より直接的に心のこもった茶道具になるからだ。

ちなみに、茶杓の作り方に関する大衆向け指南書としてもっとも早いのは、管見の及ぶ限り、断片的には『茶道全集』巻の六（創元社、一九三六年）に収載された近重真澄（号：物安）「茶杓を削るの記」など数編の諸論、そ

して一冊の著書としてまとまった形としては篆刻家・楠瀬恭卿（号：日年）『私は茶杓をかう削る』（造形芸術社、一九四二年）が初めてのものではないかと思われる。

簡単に作れ、量産ができ、書付や命銘なども比較的容易に行えたことが、先の結果に表れているのではないか。そう筆者は考える。

■茶入と茶碗

茶入は古来、掛物とともに茶会の主役であった。茶入に関する逸話には事欠かない。

表一を用いて、歌書付のある茶道具を産地別（国別）に分類してみると、次のような結果になる（表一「分類②」を参照）。道具名からでは判定できないものは「不明」とした。

	中国	朝鮮	日本	不明	計
茶入	一四点	○点	二七六点	一点	二九一点
茶碗	五点	一二○点	一六二点	二点	二八九点

ここからいくかの興味深い事実が見えてくる。

まずは、茶入の場合。唐物には歌書付のあるものは稀で、反対に国焼には歌書付のあるものが多く見られる。顕著なのは、唐物と称される中国産の茶入はごくわずかで、そのほとんどが国焼茶入であることで、国焼が全体に占める割合は、約九五％である。そもそもなぜ茶入が朝鮮半島で作られなかったのかが疑問だが、今はその問題は置くとして、ここに中国と日本に明確な区別があること、それに加え国産の茶入に歌書付があるのは珍しくないが、反対に中国産の茶入に歌書付があるのは、珍しいことだということを指摘しておきたい。これは早くから唐物が珍重されたた

めに、銘か呼称かは不詳だが、その多くに元々の所持者の名前を付けて区別することが行われたためではないだろうか。実際、名物漢作茶入と呼ばれ、古来評価の高いものには、所持者の苗字がそのまま銘とされていることが多い。それに対し、瀬戸茶入に代表される和物茶入の場合、もともと数が多い上に、小堀遠州以降に名物として認められたという、いわゆる「中興名物」に属するものが多いことや、江戸時代に入ってから新たに作られたものものも少なくない、というのが特徴である。

つまり、唐物茶入に比べ、名物意識の認識が遅かったことや、小堀遠州が歌を用いて銘を多く付けたこと、それに江戸時代以降も新たに作り続けられたこと、などが和物茶入に歌書付が多く見られる所以ではないだろうか。新たな命銘方法が生まれ、これが継承されたが故に、和物茶入に歌書付が多く見られるという結果が生じたのではないかと考えられるのである。

ちなみに、茶入ほどではないが、薄茶の際の茶の容器である棗に歌書付が多いのも、こうした理由によるものだろう。

では茶碗の方はどうだろう。茶碗には茶入とはまた違った興味深い傾向が見られる。ここでは、いわゆる高麗茶碗という朝鮮半島由来の茶碗と、和物と呼ばれる国焼茶碗にほぼ二分されることだ。その割合は、高麗茶碗が全体の約四十一％、国焼茶碗は約五七％と、両者を合わせると全体の九八％になる。

ということは、茶碗の場合、「中国」と、「朝鮮・日本」との間に、一つの明確な線があることになる。茶道史研究や美術研究の分野で、縷々述べられているように、朝鮮半島の茶碗は、室町時代以降、日本に多く輸入され、秀吉の朝鮮出兵以降、九州に移り住んだ陶工も少なくなかった。また本来朝鮮半島では他の用途に使われていたものに、価値を見出し、高く評価して用いたという経緯もある。こうした諸事情によって、朝鮮半島で産せられた茶碗は、中国産の茶碗（唐物茶碗）とはまた異なる価値観で評価されていたものと思われる。

■中国産（唐物）茶碗の特徴

中国産（唐物）茶碗で、歌書付があるものが五点あるが、それらすべてを挙げてみるとそこに特徴があることがわかる。この五点の茶碗とは、人形手茶碗・銘「亜聖（あせい）」、宋影青（いんちん）茶碗・銘「一輪（いちりん）」、珠光青磁茶碗・銘「荷葉（かよう）」、古染付茶碗・銘「百千鳥（ももちどり）」、灰被天目茶碗（無銘）、である。

興味深いのは、茶碗の場合、銘「百千鳥」と、歌書付はあるものの銘のない灰被天目茶碗以外の三点の茶碗には、いずれも「音読み」の銘が付けられていることである。こうした言葉は基本的に和歌の世界では使われない。「亜聖」の場合、「さかしきひと」が、「荷葉」の場合は「はちす葉」が、「一輪」の場合は「一花（ひとはな）の」という語が使われるのである。

実際、これらの道具に書き付けられた歌には、当然こうした漢語は入っていない。銘「亜聖」茶碗には「世の中にこの子供らを友として日々にたのしむ松風の音」、銘「荷葉」茶碗には「はちす葉はうつる影さへ池水のそこのにごりにしまぬ色なる」、銘「一輪」には「うちそとの露地のまがきはつぼみのみ床にかがやく朝顔の花」という歌がそれぞれ書き付けられている。ただ、この内、「荷葉」にはそれに相当する「はちす葉」という語が見られるものの、「亜聖」、「一輪」に引かれた歌に、それに相当する語を見いだすことは不可能である。

ではなぜこのような銘が付けられたのだろうか。「一輪」の方は、歌から容易に見当が付く。銘「一輪」茶碗は、小林一三（号：逸翁）によって歌が詠まれ、書付および命銘がなされたものだ。歌と銘は、利休が秀吉を招いた、いわゆる「朝顔の茶会」の逸話に基づくものと見てまず間違いない。この話は『茶話指月集』（一七〇一年刊）などに載る逸話で、利休に関する逸話の中でももっとも有名なものの一つであると言っていい。『茶話指月集』から該当箇所を引用しておこう。

宗易庭に牽牛花（アサガホノ）みことにさきたるよし太閤へ申上る人あり、さらは御覧せんとて、朝の茶湯に渡御ありしに、朝か

ほ庭に一枝もなし、尤無興におほしめす、扨、小座敷へ御入あれハ、色あさやかなる一輪床にいけたり、太閤をはしめ、目さむる心ちし玉ひ、はなハた御褒美にあつかる、是を世に利休かあさかほの茶湯と申し傳ふ[一八]

では、銘「亜聖」茶碗の場合はどうだろう。この茶碗は、井上馨（号：世外）が所持していたもので、野崎広太（号：幻庵）『茶会漫録』や高橋義雄（号：箒庵）『東都茶会記』などにも何度か登場する。その中でもっとも記載の詳しいものを参考までに転載しておこう。

人形手茶碗は遠州箱書付にて、桐木地蓋表に、かしこさ限りなければ亜聖と名くとあり。裏に、

世の中に此子供等を友として
日々に楽む松風の音

の歌と宗甫の名書あり。小形にて中に人形四体あり、外廻りに一箇所石ハゼを見せて、世間に有り触れたる人形手の兎角茶味に乏しきに似ず、如何様遠州の説の如く其賢さ限りなければ、之を亜聖と命名せしは尤千万と思はれぬ。[一九]

「亜聖」という語は、「聖人につぐ人。大賢人。多く、孔子を聖人とするのに対して、特に顔回あるいは孟子の美称に用いられる」と辞書にはある[二〇]。先の転載箇所からわかるように、この茶碗の桐箱裏には「かしこさ限りなければ」とあり、また「中に人形四体あり」とあることから、この茶碗の貴賓と絵を見て、遠州が自詠歌を書き付けたものと思われる。小堀遠州は多くの子[二一]や弟子に恵まれたので、その感慨をこの茶碗に重ね合わせたものかもしれない。

ここでなぜ「音読み」であることに拘泥する理由は、茶入の場合は中国産であっても銘は「音読み」ではなく、和

歌の一部の字句を用いた「訓読み」、つまり「漢語」ではなく「和語」であるからである。茶入には明確な差がないのに、茶碗には差があるのか、その理由がわからない。茶入は銘で区別する必要がなかったのに対し、茶碗では銘でも区別する必要があったのだろうか。この点については、今後引き続き考えてみようと思う。

以上、本項で見てきたように、数は少ないものの、中国産茶碗（唐物）茶碗に銘が付けられている場合、銘のほとんどが音読みであること、また歌は茶人の自詠歌であること、がわかった。次項では茶杓、茶入、茶碗以外の道具について考えてみよう。

■それ以外の茶道具

茶の湯の道具には、古来、遠近ということが言われる。『分類草人木』（一五六四年成立）の記述を見てみよう。

一　道具に遠近と云う事、之れ有り。茶入・天目は、近き第一。水指・水翻・茶杓・柄杓立・蓋置、第二。葉茶壺、香炉・画・花生は、遠き物也。[二二]

道具には遠近があり、茶入や天目茶碗は第一に近いものである。次に近いのは水指や建水、茶杓、柄杓立、蓋置である。茶壺や香炉、絵や花入などは遠いものだ、というのである。簡単に言えば、茶会中、茶人や客が触れることのできる茶道具は近く分類されており、掛物や花入など床の間に掛けたり、置いたりするものは遠い道具ということになる。

同様の記述が『烏鼠集』巻三にも見える。

一　茶湯の名物に遠近の口傳あり、小壺・茶入・天目茶碗等、茶に近道具之第一也、水指・水滴等は茶近第二也、

茶杓・柄杓立・蓋置等ハ茶近第三也、火筋・炭取等ハ第四也、釜ハ貴賤・貧富ともに眞草になくて不叶、雖然、頃者（このごろ）如形して、古くの比なれハ大略不苦也、葉茶壺ハ第一によきを求へし、是茶湯ノ本也、花生ハ遠物第一ニシテ近物也、繪字ハ遠物の第二にちかし、香爐・香合ハ遠物の第三近物也、此外にも遠近の分別有へし、[二三]

先に示した『分類草人木』とは、いくつか文言の異なる点はあるものの、道具の遠近に関してはそれほど大きな差は見られない。

これらの記述によると、これまでに見てきた茶杓・茶入・茶碗はいずれも「茶に近い」道具に属するものであり、さらに言えば、通常の茶会で「拝見」する道具でもあると言えよう。これらの茶道具には歌書付が多く見られる。それに対し、花入以下の道具は、水指を除いてはいずれも遠い道具に分類される。これらには歌書付が比較的少ない。花入は全体の約六％あるが、香合と水指はそれぞれ全体の二％に満たない数しかないという結果であった。

次に、花入を材料で分類してみると次のような結果になる（表一「分類③」参照）。

竹：五二点
瓢箪：六点
金属：五点
磁器：二点
陶器：二点
不明：四点　**合計**：七一点

大きく言えば、植物、金属（かな物）、陶磁器（焼物）という順になるが、そのなかでも際立って多いのが竹製の

花入であり、これだけで全体の約七三％を占める。瓢箪も入れると、植物が八割を超える。

竹も瓢箪も、千利休が初めて花入に用いたというのが通説となっている。竹の場合は、銘「園城寺」が、瓢箪の場合は銘「顔回」がそれに当たる[二四]。つまり、現在我々が知るところの「わび茶」の大成期以降に用いられるようになった茶道具に歌書付が多いということになる。反対に言えば、それ以前から認められていた金属製や青磁製などの唐物花入に歌書付が行われるのは、大変稀なことであったと言えよう。

さらに言えば、日本には広く「真・行・草」といった分類法がある。元来は書の世界で用いられたものだが、それが他の領域にも及び、立花（華道）や茶の湯の世界でも重視されるようになった。茶道具にも「真・行・草」の区分があるが、花入の場合、金属に近づくほど「真」になり、植物に近づくほど「草」の道具になる。したがって、歌書付がなされる道具のほとんどは、「草」に属する茶道具であると言える。

木地を使っていたとしても、漆芸品はまた特別なようだ。よく知られているように、蒔絵など日本では漆工芸が非常に発達し、たとえば室町時代には、和歌の絵解き（歌絵）が流行したりもした。したがって、棗や香合などの漆芸品には意匠が施しやすく、歌を書き付けるのは多くある表現の中の一つでしかなく、また場合によってはあえて和歌の字句を書き付けないほうが楽しみは多いのかもしれない。

水指にも歌書付が行われることがあるが、いずれも全体から見るとごく少数にとどまるようである。水指に陶磁器製のものが圧倒的に多い。もちろん曲物や塗物、まれに金属製のものもあるが、これらは水指全体から見ると、さほど多くはない。

■総括

本稿で明らかになったのは、以下に示した七点である。

①歌銘としては歌枕などの地名よりも、季節の方が圧倒的に多い。

②他の季節に比べ夏に関する歌銘が多く見られる。
③歌銘として好まれる字が存在する。
④歌銘茶道具で量的にもっとも多かったのは「茶杓」であった。
⑤「茶杓」に次いで多いのは、「茶入」と「茶碗」であり、ほぼ同程度であった。歌銘が付けられるのはほぼこの三者に限られる。
⑥「茶入」では和物がほとんどであったが、「茶碗」では高麗物と和物がほぼ同数存在した。いずれにせよ唐物（中国産）の茶道具に歌が書き付けられることはほとんどないと言っていい。
⑦いわゆる「茶に近い」道具に歌が書き付けられることが多いことがわかった。

今後は、由来歌の特徴、茶人や流派による特徴などを、順次明らかにしていきたいと考えている。

注

一　『国史大辞典』第二巻、吉川弘文館、一九七〇年、一〇八頁。芳賀幸四郎執筆担当。

二　ちなみに筆者は以前、拙著『茶道と恋の関係史』（思文閣出版、二〇〇六年）において、茶会記を用い、そこに記録された和歌の掛物の変遷について分析と考察を加えたことがある。その結果、小堀遠州以前の茶の湯では、和歌の掛物が用いられることがあっても、それは「小倉色紙」などの名物だけに限定されていたし、季節感もほとんど考慮されていないことがわかった。ところが小堀遠州が活躍した時代に、季節感が掛物でも重視されてくる。これは和歌の内容が重視され出したことを意味する。それに伴い、やがて恋歌が茶の湯の掛物としてふさわしくないとされる時代が到来する。こうした一連の流れに興味のある方は、拙著を参照されたい。

三　名児耶明「遠州の箱書と歌銘」（五島美術館編『図録　遠州の観た茶入』五島美術館、一九九六年）、一五四～一五七頁。

四　八木意知男「歌銘の世界―茶歌道交渉史の一齣―」茶道資料館編『茶の湯の名器―由来と銘―』、茶道資料館、一九八八年、八四頁。

五　同前、九八頁。
六　同前、一〇五～一〇六頁。
七　同前、一一〇頁。
八　三村晃功は『古典和歌の世界―歌題と例歌（証歌）鑑賞―』（新典社新書三七、平成二十二年）において『新編国歌大観』全十巻の総歌数を「おおよそ五十万首を優に越えるようだ」としている（十五頁）。
九　前掲名児耶論文、一五七頁。蛇足ながら念のために説明を加えておくと、二首の箇所に列記されたものは計十二首、一首の箇所に記されたものが計九首であり、その前に記された十三首と合わせて三十四首となる。
一〇　同前。
一一　詳しくは、前掲拙著『茶道と恋の関係史』を参照されたい。
一二　前掲名児耶論文、一五七頁。
一三　表一では、計算の都合上、これらを一括して「棗」と分類した。
一四　『茶道全集』巻の八、創元社、一九三六年、二三～二四頁。
一五　同前、二四頁。茶入の分類で「唐物」は中国（宋）の窯で焼かれたものを、「和物」は国焼、「島物」とは南方の島で産せられたものだが、実際には中国南部で焼かれたものだという（唐物、和物以外の茶入と考えるのが適当かと思う）。他方、茶碗の「支那」とは主として唐末から宋代のもの、「朝鮮」とは李朝時代から日本でいえば秀吉の時代のものまでを指し、「日本」とは主として楽焼とその他の国焼のことだという。
一六　高原杓庵は『柳営御物集』、『中興名物記』、『玩貨名物記』、『雲州蔵帳』、『土屋蔵帳』、『滝本坊名物』、『神尾蔵帳』、『酒井家蔵器帳』、『矢倉道具帳』、『遠州蔵帳』をもとに編集に当たった（『日本美術工芸』第一六九号、日本美術工芸社、一九五二年、四四～四六頁）が、その他にも名物記には収載されていない茶杓を発見し、紹介しているため、その学術的価値と資料的価値は非常に高い。
一七　『茶道全集』は、茶道研究史において、画期的な出版物であった。当時の感想を一つだけ紹介しておこう。ドイツ語の翻訳者で、随筆家でもあった小池堅治（号：秋草）は「茶杓の銘」と題した小品で、次のように述べている。『茶道全集』のやうな大がゝりな叢書が次々に出版され、今まで旧大名の文庫や数寄者の抽斗深く蔵まつてあつた抄本写本の類が、活字姿に改装させ（ママ）太陽の光に曝されるやうになつたのは、深窓の佳人が巷に引つ張り出され心なき人の視線にスポイルされるやうに、多少のいたいたしさを感ずるが、何といつても専門家の利便は大きい。又素人の好奇心の猟区を押拡げるのに役立つもので

ある」（小池秋草『雪板：随筆』書物展望社、一九三八年、一一頁。）

一八　藤村庸軒（述）・久須美疎安（記）『茶話指月集』上巻、今井重左衛門、元禄十四（一七〇一）年、十三丁表～裏。

一九　高橋箒庵『東都茶会記』三、淡交社、一九八九年、三八三頁。ちなみに引用した箇所は、『東都茶会記』では「世外院遺志茶会」と題された記事中にあるものであり、一九一六年十一月五日から四日間行われた茶会において用いられた際の記述である。

二〇　『日本国語大辞典（縮刷版）』小学館、一九七九年、二八〇頁。

二一　横井時冬『小堀遠州・本阿弥光悦（偉人史叢　第七巻）』（裳華書房、一八九六年）には「政一六男六女あり」とある（六頁）。

二二　『分類草人木』（林屋辰三郎ほか編注『日本の茶書』一、平凡社《東洋文庫二〇一》、一九七一年、二八〇頁）。

二三　裏千家今日庵文庫編『茶道文化研究』第一号、裏千家今日庵文庫、一九三頁。校注のために付された記号や注などは省いた。

二四　いずれも前出『茶話指月指』に載る話。

Cousideration on *Utamei* Tea Utensils: Focusing on the Different Types of Utensils

IWAI Shigeki

This paper is a study of *utamei* tea utensils. Reflecting on the problems of previous research, we redefined *utamei* tea utensils as “tea utensils with poems written on them.”

We collected 1190 tea utensils that fall under this definition, made a list of them and deduced characteristics. As a result of our research, we uncovered the following characteristics.

① The number of seasonally themed utamei is much larger than the number of place names and *utamakura* (poetic geographical allusions) used as utamei.

② There are more *utamei* related to summer than *utamei* related to any other season.

③ Certain characters are particularly favoured as *utamei*.

④ Out of all *utamei* tea utensils, *chashaku* (tea scoops) are the highest in number.

⑤ *Chaire* (tea containers) and *chawan* (tea cups) are the second highest in number. Both were found in equal numbers. *Utamei* are virtually limited to these three types of utensils.

⑥ Most tea containers with *utamei* are *wamono* (made in Japan), but tea cups with *utamei* are *komamono* (made on the Korean Peninsula) just as often as *wamono* (made in Japan). We can conclude that *utamei* were almost never written on any kind of *karamono* utensils (made in China).

⑦ Poems were often written on tea utensils “close to the tea.” Tea utensils “close to the tea” are mainly utensils which are meant to be admired during the ceremony and which come in direct contact with the powdered green tea.

This paper considers the reasons behind these characteristics.

In the future, we will look at the characteristics of both the original poems, and the different people who gave *utamei* to utensils.